



Title	多総合的言語としてのアイヌ語：普遍文法理論の視点からの試論
Author(s)	奥, 聡
Citation	アイヌ語学と現代の言語理論, 井筒勝信編, pp.161-200
Issue Date	2008
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34694
Type	report
Note	科学研究費補助金（若手研究(B)）「アイヌ語基礎文法の認知言語学的研究」の第2年目の研究実績報告書
File Information	Ainu_OKU-2008-03-14.pdf



[Instructions for use](#)

多総合的言語としてのアイヌ語 普遍文法理論の視点からの試論 -

奥 聡

1. はじめに

Baker (1996, 2001)は、アイヌ語を多総合的言語(polysynthetic language)の代表的語族の一つに挙げている。アイヌ語の他に挙げられている言語族は、カドー語族 Caddoan (北米)、タノ語族 Tanoan (ニュー・メキシコ)、ナワトル語族 Nahuatl (メキシコ中部)、グンウィングアン語族 Gunwinjguan (オーストラリア北中部)、旧シベリア語族 Paleosiberian (シベリア北東部)、マプチェ語族 Mapuche (チリ中部)、ムンダー語族 Munda (インド)である。これらは地理的にも分散しており、一部を除いては歴史的な関係を同定することも難しい。一方で、これらの言語の基本的文法特徴が共通しているとみなすだけの十分な根拠が明らかになってきている。そのような共通の文法的特徴が偶発的であるという可能性は「二人の人間が別々にコインを 100 回投げて、全く同じ表と裏の出方をするのに等しいくらいの確率」(Baker 2001: 115)であり、現実的にはありえないこととなる。歴史的な関連もなく、偶然でもないとするれば、なぜこれらの言語族に著しい共通的特徴がみられるのか。Baker を初めとする理論言語学の答えは「人類に共通する生物学的資質により文法の基本的特徴が一定の範囲内に定まるようにプログラムされているから」ということである。

基本的文法関係を表わす方法を具体例にして考えてみよう。たとえば、二つの名詞句を必要とする動詞(一般に他動詞と呼ばれる)を例にすると、文中に現れた二つの名詞句がその動詞との文法関係(「主語」であるか「目的語」であるか)を示す方法という観点から、世界の言語を分類すると、大きく分けて次の三つのタイプに分けることができる。一つは、語順(文中での単語同士の位置関係)によるものである。現代英語がその代表例の一つであり、通常他動詞であれば動詞の前の名詞句が主語として、動詞の後の名詞句が目的語として機能している。語の持つ形態的特徴によって文法機能を明示するわけではないので、形態的には「isolating タイプ」と呼ばれる。二つ目は、文法機能が名詞句に形態的に標示されるものである。ラテン語(名詞句の語尾屈折により機能を明示)や日本語(名詞句に助詞(particle)をつけることにより機能を明示)などである。動詞の項(argument)となる名詞句に形態的マーカーがつくことから、「dependent-marking タイプ」と呼ばれる。最後に三つ目として、動詞語幹(verb root)につく一致(agreement)あるいは屈折の形態により、文中の名詞句の文法機能を明示するタイプの言語がある。これは主要部(head)となる動詞につく形態的マーカーによって、主語や目的語の文法機能を明示することから、「head-marking タイプ」の言語と呼ばれる。たとえば、男性単数の名詞句と女性複数

文中にある場合、この二つの名詞句間の語順にかかわらず、動詞に接頭辞（一致を示す形態素）のついた複合形が $M_S S = F_P O = V$ という形になっていれば、男性単数名詞が主語で女性複数名詞が目的語となり、動詞の複合形が $F_P S = M_S O = V$ という形になっていれば、女性複数名詞が主語で男性単数名詞が目的語である。動詞語幹についている一致要素の形態とその順序により名詞句の文法機能を標示するという仕組みである。モホーク語(Mohawk)やアイヌ語などが、この第三のグループに入ると考えられる¹。

もし、人類の持つ言語獲得にかかわる DNA が基本的に上の三つのタイプのどれかを選択するようにプログラムされているとすれば、人間言語はかならず、上記の三つのタイプのどれかに属していることになる。さらに、Baker (1996)は head-marking タイプであるかどうか、その言語の他の文法的特徴の多くを決める「大パラメータ(macroparameter)」である可能性を詳細に論じている。Baker の主張が正しければ、地理的歴史的につながりのない言語同士が、文法の基本的な部分で多くの共通性を持っていたとしてもそれほど不思議ではないことになる。

Baker (1996)はモホーク語のさまざまな文法的特徴に、「原理とパラメータのアプローチ (Chomsky 1981 など)」の視点から理論的な説明を与え、さらにその知見を他の「多総合的言語」と考えられる諸言語にどの程度当てはまるかを詳しく論じている。「多総合的言語」と考えられる言語の選択に関して、Baker は名詞抱合 (Noun Incorporation、以下 NI と略記) が Mithun (1986)の提案する III または IV の特徴 (下記参照) を備えているかどうかのみを選択基準としている。すなわち、ある限られた特徴のみに基づいて抽出された複数の言語において、ある理論が予測するその他の文法的特徴においても多くの共通点があると確認できれば、その理論の妥当性がより高まるといえる。別の述べ方をすると、それらの言語の文法上の諸特性の本質をその理論が明らかにしている可能性が大きくなるということである。

Mithun (1986)の NI に関する特徴の III と IV は、次の通りである。

(1) III: the noun is referentially active in the discourse.

IV: both the noun root and the verb root can, in general, be used independently.

¹ この三つのタイプのうちのある一つのタイプに属すると考えられる言語においても、別のタイプの言語の特徴が部分的に見られる場合はありうる。たとえば、典型的な isolating タイプの言語といわれる英語であっても、代名詞に関しては、we であれば主語、us であれば目的語などのように、名詞の形態的特徴に文法機能が明示される場合もある。あるいは、典型的な dependent-marking タイプの言語といわれる日本語でも、格助詞によって主語と目的語を区別できない場合もありうる。たとえば「太郎が、花子が好き (なことは公然の秘密だ)」という文では、「太郎」も「花子」も「が」格でマークされているので、形態的特徴だけで主語と目的語を区別することはできない (文脈によってどちらの解釈もありうる)。このような「例外的な」場合も少なからず存在するが、それでも多くの言語において、その言語に典型的なパターンであれば上記三つタイプのいずれかに当てはまるとみなすことができる。アイヌ語については以下で論じる。

(1-III)の特徴は、NI が統語的に行われていることを示す根拠とされる。すなわち、NI が単に語彙化(lexicalization)によるものや歴史的に存在した過程ではあるが現在は、その結果が化石化して残っている(historical residue)という可能性を排除するための基準である。また、(1-IV)はNI が特定の語では義務的であるが、別の語では不可能であるような言語(エスキモー語族など)を排除するための基準である。

これらの特徴を備える言語として、Mithun (1986)は上記の語族のうち、タノ語族とアイヌ語とムンダー語族を除いた言語を挙げている。Baker (1996)は、Mithun 以降の研究に基づき、タノ語族も明らかに上記(1-III)または(1-IV)の基準を満たしており、多総合的言語と認められるとしている²。アイヌ語に関しては、Baker (1996)はデータは不十分であるとしながらも、上記言語と同様に多総合的言語の一つであると考えられる可能性が高いとし、可能な限り論じている³。

本稿では、Shibatani (1990)のほかに、Izutsu (2004)、井筒(2006)および筆者が得られるデータを利用して、Baker の提案する意味での「多総合性」をアイヌ語がどの程度持っているのかを、ごく一部の現象についてではあるが、検討することを目的とする。まず、第2節では表面的に確認できる現象から見ても、アイヌ語には Baker (1996)で挙げられている他の言語との共通性が十分にあることを確認する。次に第3節で、Baker (1996)が提案している文構造およびそれを支配する文法の原理に従い、アイヌ語の基本的文構造を明示的に表わす。第4節は、第3節のような構造と原理を仮定することによって予測される文法上の振る舞いに関して、アイヌ語がどの程度当てはまるかを、照応形、量化表現、疑問詞疑問文を中心に検討してみる。第5節はまとめである。

2. アイヌ語の多総合的特性：表面的な現象の観察から

比較的ナイーブな表面的現象の観察からでもアイヌ語が、Baker がいう意味での他の「多総合的言語」と共通の特徴を持つことがわかる。まず、第一の典型的な特徴として、目的語の名詞抱合(NI)において、N が主要部動詞の直前に現れるということである。その他の接頭辞がある場合もすべて、N-V の外側につくことになる。これは、基本語順が

² ムンダー語族に関しては、Baker (2001)では疑問符つきで、多総合的言語の可能性に触れているが、Baker (1996)では詳しい検討の対象となっていない。

³ NI されている名詞が、談話的に active であるかの判断は、簡単ではないが、アイヌ語の次の例がその可能性を示唆していると考えられる。

- (i) a. turep-e-rusuy=an
うばゆり-食べ-欲する=我々は
b. a=mukcar-tuye
1SG=chest-cut

(Shibatani 1990: 64)

(ia)では、「うばゆり-食べ-たい」という述語が、慣習化された一まとまりの概念として、辞書に登録されているとは考えづらい(井筒氏との個人面談による)。また、(ib)の Shibatani の例においては、「胸(mukcar)」が談話上明らかな、特定の人物の胸を指しているというコンテキストで使われている可能性が高い。もしそうであるとすれば、NI されている名詞が談話的に active であることになる。

SVO であると考えられるものも含めて、Baker が検討している全ての多総合的言語に共通の特徴であることが興味深い点である。(2a-g)は Baker (1996: 27-28)から、(2h)は Shibatani (1990: 64)からの引用である。NI されている名詞を斜字体で表記してある。

- (2) a. モホーク語(Mohawk)
 Wa-hake-natar-a-kwétar-Λ-ʔ.
 FACT-MsS/1sO-bread-φ-cut-BEN-PUNC⁴
 ‘He cut the bread for me.’
- b. ウィチタ語(Wichita)
 I-s-kí-ic-?asin-n?i.
 IMPER-2sS-1sO-ben-shoe-make/PL
 ‘Make me a pair of shoes.’
- c. 南チワ語(Southern Tiwa)
 Ka-‘u’u-wia-ban.
 1sS/2sO|AO-baby-give-PAST
 ‘I gave you the baby.’
- d. ナワトル語(Nahuatl)
 Ni-quin-xōchi-tēmo-lia.
 1sS-3pO-flower-seek-BEN/PRES
 ‘I seek flowers for them.’
- e. マヤリ語(Mayali)
 Bandi-marne-ganj-ginji-ng.
 3pS/3pO-ben-meat-cook-PAST/PERF
 ‘They cooked meat for them.’
- f. チャクチー語(Chukchee)
 Mət-meč-qora-gərke-plətko-mək
 1pS-almost-deer-hung-finish-1sS
 ‘We almost finished hunting reindeer.’
- g. アイヌ語
 A-φ-ko-tam-enere.
 1sS-3sO-APPL-sword-swing
 ‘I swung the sword at them.’
- h. A-mukcar-tuye
 1sG-chest-cut
 ‘I cut his chest’

⁴ 例文の gloss に出てくる用語・記号の意味は本稿末尾の Appendix にまとめて示す。

目的語の NI の具体例は記録されているアイヌ語文献においても多数見出すことができる構文であると考えられるが、Baker のいう意味での統語的な NI が、現代口語アイヌ語にも生産的な文法プロセスとして存在するかどうかは、慎重に議論しなくてはならない。しかし、目的語の他動詞への NI が次の二つの条件を基本的に満たしているのであれば、Baker がいう意味での NI であると考えることが可能であろう。

- (3) NI が許される動詞や目的語が、特定のものに限定されているわけではない
- (4) NI に現れる動詞や目的語が、独立の語として統語上振舞うこともできる

NI がすでにアイヌ語における生産的なプロセスではなく、化石化した特定の[N-V]だけがレキシコンに登録されているのであれば、(3)(4)の条件は満たされないということになり、他言語からの新しい借用語を目的語とした NI を現在のアイヌ語話者が認めるとすれば、つまり(5)も上記(2g)と同じように自然な文であるとすれば、NI がアイヌ語でいまだに生産的な文法プロセスあることが確認できるであろう。

- (5) A- ϕ -ko-nayfu-enere. (Cf. (2g))
 1sS-3sO-APPL-knife-swing
 ‘I swung the knife at them.’

第二に、動詞語幹(verb root)に接辞として現れる人称の一致形態素(agreement morpheme)が義務的であることも、多総合的言語の重要な特徴である。すでに見た(2g-h)の A-や、(6)以下の e=, en=などをどのような文法要素であるとみなすかについては、さまざまな考え方があがる。伝統的なアイヌ語研究においては、これらは「人称接辞(personal affix)」とするのが一般的なようである⁵。しかし本稿では、Baker (1996)の分析を前提として、これらは動詞語幹につく人称一致形態素(personal agreement morpheme)であると仮定する⁶。これは、単に用語上の違い(同じ実体をたまたま異なる呼び方をしている notational variant に過ぎないこと)ではなく、より本質的にこの要素の文法上の特徴づけ、さらにはアイヌ語の文構造全体の性質にかかわるものである(Baker 1996: 16)。具体的な構造の提案は第3節

⁵ 動詞に接辞化しているこのような要素を、ある種の代名詞(pronoun)、つまり真の主語や目的語であるとする考え方もある。これは世界の言語研究の中で長い伝統を持つ考え方である。Foley (1991: 228)によれば、このような考え方は少なくとも 1830 年代のフンボルト(Humboldt)によるアステカ語(Aztec)の分析にまでさかのぼる。モホーク語と同じイロコイ語族のオナイダ語(Oneida)の当該の形態素を分析した Lounsbury (1953)は、「代名詞的接頭辞(pronominal prefixes)」という用語を用いていることから、このような考え方に与していたことが読み取れる。生成文法の原理とパラメータのアプローチの枠組みでも、Jelinek (1984, 1988)が、この考え方を発展させて議論している。

⁶ “... the morphemes on the verb do not *replace* conventional argument phrases in these languages, but rather in some sense *reinforce* them.” (Baker 1996: 15)

で論じるが、アイヌ語では少なくとも一人称と二人称に関しては、基本的に主語一致も目的語一致も義務的であり、「多総合的言語」は人称一致が義務的であるという要件を満たしていると考えられることができる。井筒(2006)によると次のようなパラダイムになる。一致要素(いわゆる「人称接辞」)の省略はできない。

- (6) a. e=en=kikkik 「お前が私を叩いた」
 you=me=hit
 b. es=en=kikkik 「お前たちが私を叩いた」
 you(pl)=me=hik
 c. e=un=kikkik 「お前が私たちを叩いた」
 you=us=hik
 d. es=un=kikkik 「お前たちが私たちを叩いた」
 you(pl)=us=hit

ただし、南西方言では、本来であれば(7)のようなパラダイムが予測されるところで、実際には(8)のようになる。

- (7) * ku=e=他動詞 「私がお前を」
 * ci=e=他動詞 「私たちがお前を」
 * ku=eci=他動詞 「私がお前たちを」
 * ci=eci=他動詞 「私たちがお前たちを」
 (8) eci=他動詞 「私がお前を」
 eci=他動詞 「私たちがお前を」
 eci=他動詞 「私がお前たちを」
 eci=他動詞 「私たちがお前たちを」

Shibatani (1990: 29)は、これらを一人称一致形態素の単なる「省略」ではなく、一人称一致形態素と二人称一致形態素とが「中和した(neutralized)形」であると述べている。Baker (1996)はモホーク語など他の多総合的言語にも見られる同様の現象に関して、当該の形態素が「混合形態(portmanteau)」となっていると分析している⁷。このように考えることによって少なくとも一人称と二人称の一致形態素は動詞の接辞(あるいは屈折)として義務的

⁷ Baker (1996: 191)の Table 5-1 にモホーク語の一致形態素が表としてまとめてあり、かなりの数の形態素において主語一致と目的語一致が共起する場合、portmanteau 化していることが見てとれる。たとえば、一人称単数が主語で、二人称単数が目的語の場合、動詞の前に現れる一致の形態素は k-sa-V 'I-you-V' という形が予測されるが、実際には、ku-V となって現れる。この場合 ku は一人称単数と二人称単数の複合体一致形態素である。同様に、二人称単数主語と一人称単数目的語の場合、hs-wak-V 'you-me-V' と予測されるが、実際には sk-V となって現れている。このように汎言語的に多総合的言語を見ると、一致形態素の混合形態(portmanteau)を仮定することは、特殊な考え方ではないことが分かる。

な要素であるという仮定を保持できる。

問題は三人称の場合である。記録されている限りにおいて、アイヌ語では三人称の一致形態素が動詞の接辞としては現れることはない。これは Baker が挙げている他の多総合的言語との大きな違いの一つである。しかし、少なくとも次のような例においては、抽象的な一致形態素が三人称の場合にもあると考えることができるかもしれない。たとえば、一人称複数主格人称一致形態素（除外形）*ci=*は、目的語が三人称であると考えられる他動詞の場合にのみ現れることができる(9c)⁸。すなわち、自動詞の場合(9b)や目的語が二人称の場合(9a)には、主語が一人称複数であっても *ci=* を使うことはできない。

(9) a. * *ci=e=kikkik*

私たちは=お前を=たたく

b. * *ci=hoyuppa*

私たちは=走る

c. *re umma ci=hok.*

(Idutsu 2004: 137[1111804])

三 馬 私たちは=買う 「三頭の馬を私たちは買った」

一人称複数主語との一致形態素であると考えられている *ci=* が、三人称を目的語とする他動詞の場合しか使えないというのが正しい一般化であるとする、*ci=* は実は一人称複数主語の一致形態素ではなく、一人称複数主語の一致形態素と三人称目的語の一致形態素との混合形態 (Shibatani 1990 の言い方に従えば「neutralized」、Baker 1996 では「portmanteau」) であると考えることができる。*ci=* が実際には一人称一致と三人称一致の混合形態であるとする、(9)の事実に原理的な説明が与えられる。すなわち(9b)では、一致すべき三人称の名詞句が存在しないために一致形態素が正しく認可されない、あるいは余剰な要素であるため、非文法的になっている。また(9a)は、目的語として二人称の一致形態素 *e=* も現れているので、*ci=* に内在する三人称目的語の人称素性と矛盾を起し非文となっていると考えられる⁹。

もしこの考え方が正しいとすると、少なくとも他動詞の目的語に関しては、三人称も一人称一致の形態素が明示的に存在すると考えることができる。同様の論理が一人称複数一致形態素 *an=* (包括形) にも当てはまる。このように考えると、混合形態としても明示的には現れてこない三人称の一致要素に関しても、ゼロ形態素が存在すると仮定するのが、アイヌ語文法全体の一貫性から考えて自然であると思われる。実際に、すでに上記(5)で示したように、Baker (1996)は Shibatani (1990)からの引用例文に、Shibatani には記されていなかった三人称一致をゼロ形態素 ϕ '3sS' として明記している。三人称のゼロ一致形態素を仮定することによって、アイヌ語の文法的説明に何か大きな問題が生じない限り、このよ

⁸ 意味上の目的語が文脈から明らかであり、当該の文中には明示的に現れない場合も含まれる。

⁹ 同様の考え方が、Baker (1996: 328-329)で論じられている。

うな仮定は保持されるべきであると考え。さらにそのようなゼロ形態素を仮定することによって、合理的な説明が出来るような文法現象が見つかる可能性も今後の重要な検討課題であろう。

人称一致形態素の語順に関しては、その言語のいわゆる基本語順が SVO であるか SOV であるかに関わらず、subj=obj=V が、ほとんどの多総合的言語に見られる基本的なパターンである。アイヌ語に関しては、主語が二人称で、目的語が一人称の場合は、完全にこのパターンに従う。また、一人称複数主語の一致形態素 ci=, an= に関しても、上で述べたように、それらが一人称主語の一致形態素と三人称目的語の一致形態素との混合形態であるとすれば、少なくとも上記 subj=obj=V のパターンには矛盾しないことになる。同様に、上記(8)の下で述べたように、南西方言の eci= も一人称主語の一致形態素と二人称目的語の一致形態素の混合形態であるとすれば、上記のパターンとは矛盾しない。

問題となるのは次のパターンである。

(10) 北東方言・南西方言

自動詞=an 私たちが(包括形)
自動詞=as 私たちが(除外形)

北東方言

e=他動詞=as 私たちがお前を
es=他動詞=as 私たちがお前たちを
e=他動詞=an 私がお前を
es=他動詞=an 私がお前たちを

二人称が目的語である場合、および自動詞の場合には、一人称複数主語の一致形態素が接尾辞(suffix)として動詞語幹の後ろに現れなくてはならない。この事実は、人称一致形態素が義務的に現れなくてはならないという要件は満たしているが、その順序が典型とされる subj=obj=V とはなっていない。「二人称が目的語である他動詞の場合」と「自動詞の場合」とを自然類(natural class)とするのは難しいと考えられるので、これは音韻論でいう「else where 条件」、すなわち「三人称が目的語である場合以外」という条件付けが説明の経済性からすれば妥当である¹⁰。これに関しては、井筒(2006: 33ff)が人称の階層性にもとづく説明を提案しているが、それ以外には興味深い形での説明はいまのところないようである¹¹。

¹⁰ ただし、一人称単数形で動詞が自動詞の場合は、ku=自動詞となり、典型的な形態素の順序に従っている。

¹¹ Baker (1996: 35)はアイヌ語のこの現象に関しては、原理的な説明は難しく、何らかの「音韻形態的分析(morphophonological analysis)」が必要となるであろうと述べている。すなわち、この接辞の持つ音韻形態的な特異性により、このような例外的な振る舞いを示しているという方向での分析方法である。

多総合的言語に共通に見られる第三の特徴として、目的語の NI が起こった場合、主語の接辞はさらにその前につくのが基本パターン(affix=N-V)となるということである。アイヌ語にもそのようなパターンを確認することができる。

(11) Affix=N-V

- a. e=inaw-ke 「お前がイナウを作った」
 お前が=イナウ-作る
- b. ku=wakka-ta 「私が水を汲んだ」
 私が=水-汲む

多総合的言語に共通して見られる四つ目の特徴として、動詞語幹とそれにつく他の動詞的な形態素との順序が同じであるという点が挙げられる。Baker の挙げている全ての多総合的言語において、以下のような形態素の順序が基本となっていることが確認されている。

(12) V-suffix aspect tense/mood

これは動詞語幹に対して、意味的に上位となる動詞的形態素が右側に現れるという一般化を示している。たとえば、使役の形態素は、モホーク語だけでなく、ウィチタ語、カイオワ語、南チワ語、ナワトル語、アイヌ語、およびグンウィングアン語で、動詞語幹に直接つく接尾辞であり¹²、相(aspect)や時制・法(tense/mood)を示す形態素よりも前に現れると考えられる¹³。また相と法の表現の語順は、(13)に見られるように、「相 法」が基本的順序であると考えられる。

- (13) a. pon_hike e=hotke-re wa an siran na
 little thing you=sleep-CAUSE PERF MOOD
 「お前は、その小さな娘を寝かせてしまったようだな」
- b. as wa an nankor kusu ... (Izutsu 2004: 77 [0103713-0103714])
 stand PERF MOOD because ...
 「(木が)立っているだろうから ...」

また、日本語の「～(し)たい」「～(し)たがる」や英語の want にあたる「願望動詞(desiderative)」は、南チワ語、ナワトル語で動詞語幹の直後に現れる。アイヌ語の願望動

¹² Baker (1996: 25-26, 28)参照。

¹³ アイヌ語で使役を表わす形態素の一つ-re は束縛形態素であり、動詞とひとまとめにして hotkere (hotke 'sleep' + re 'CAUSE')と表記するのが今日では一般的であるようだ(井筒氏の指摘による)が、本稿では、形態素の働きを明示する意味で、やや古い表記法で動詞語幹と接尾辞との間にハイフンを入れて表記する(Shibatani 1990 もこの表記法を採用している)。

詞 *rusuy* も動詞語幹の直後に現れる。*rusuy* が束縛形態素であるか自由形態素であるかは議論の分かれるところであるが、Shibatani (1990)によると、動詞語幹+*rusuy* の後に人称接辞（本稿では、人称一致形態素）が現れる例があるので、*rusuy* も接辞的要素であると仮定する。

- (14) a. Wakka-ku-rusuy-an
 Water-drink-want-1sg
 ‘I want to drink water.’
 b. Kina-e-rusuy-an
 herbs-eat-want-1sg
 ‘I want to eat herbs.’ (Shibatani 1990: 78)

興味深い点は、以下のように *rusuy* の後に法をあらわす要素が現れる語順になるということである。

- (15) ku=hosipi rusuy haw ne nankor sekor katkemat itak. (Idutsu 2004: 130
 I=return want EVD will COMP lady speak [1107213-1107214])
 「(私は) 帰りたいがっているのだろうと奥さんは言った」

以上のように、基本的語順が「V + affix + 相 + 法」となっているということは、アイヌ語のように基本語順が SOV であると考えられる言語においては、特に驚くべき特徴ではないかもしれない。しかし、SVO が基本語順と考えられる多総合的言語も含め、Baker (1996)が考察している全ての多総合的言語において、この形態素順が基本的に共通しているという点が興味深い。基本語順が SVO であるか SOV であるかにかかわらず、動詞類の複合形を作る文法上のメカニズムが全ての多総合的言語において共通である可能性を示唆しているからである。

以上、表面的に観察できる現象からも、アイヌ語が他の多総合的言語と多くの文法的特徴を共有していることが確認できることを見てきた。次の第 3 節では、Baker (1996)の提案する多総合的言語の基本的文構造と、それを支配する普遍原理を紹介する。

3. 多総合的言語の基本構造：Baker (1996)の提案

第 2 節で見てきたように、多くの多総合的言語と基本的文法特徴を共有していることから、アイヌ語も Baker の定義する意味での多総合的言語の一つとして分析をすることは理にかなっている。Baker (1996)は、多総合的言語に共通するさまざまな特徴を決定する大本の「大原理(macroparameter)」として、「多総合性パラメータ(polysynthesis parameter)」または「形態的可視条件(morphological visibility condition: 以下 MVC と略記)」を提案してい

る。

(16) *The Polysynthesis Parameter (informal)*

Every argument of a head element must be related to a morpheme in the word containing that head. (Baker 1996: 14)

(17) *The Morphological Visibility Condition (MVC)*

A phrase X is visible for θ -role assignment from a head Y only if it is coindexed with a morpheme in the word containing Y via:

(i) an agreement relationship, or

(ii) a movement relationship. (Baker 1996: 17)

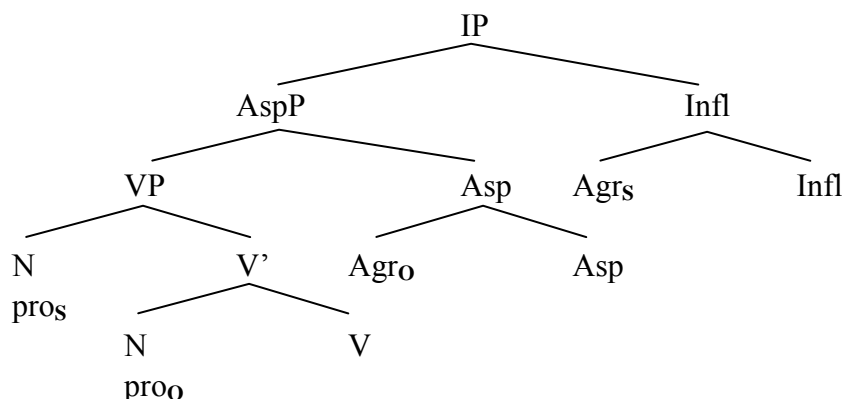
(16)はインフォーマルな述べ方ではあるが、たとえば、動詞の主語や目的語は全てその動詞を含む「語」の中の形態素と結び付けられていなければならない、ということである。具体的には、動詞語幹に人称一致要素が現れるか名詞抱合 NI が必要ということになる。(17)は同じ内容をもう少しフォーマルに述べたものである。(17)をパラメータの一つと仮定し、この値が yes である言語が、多総合的言語であると理論的に定義される。この値が no である言語は、ここで定義する意味での多総合的言語ではない。インド・ヨーロッパ語族全般や日本語などがそのグループとなる。

アイヌ語を含む多総合的言語が共通に持つ諸特性が、(17)及び他の普遍原理との相互作用から自然に導き出すことができれば、なぜそのような諸特性があるのかということに対して、人間が生得的に持つ言語能力上の資質に基づいた、原理的説明を与えることができる。各言語固有の特性に関してどれだけアドホックな仮定を付け加えることなく説明できるかが研究上の課題となる。

Baker (1996)は、多総合的言語に共通する文の基本構造として、次の(18)を提案している¹⁴。

¹⁴ Baker (1996)は、ほとんどの場合、主要部先端型(head-initial)の構造を用いて説明をしているが、本稿ではアイヌ語にあわせて主要部末端型(head-final)の構造で表記する。興味深い点は、主要部先端型の言語でも主要部末端型の言語でも、最終的に出来上がる複合動詞の形態素の順序が、基本的には同じであるということである。

(18)



まず、動詞を主要部とした動詞句(VP)の補部(complement)と指定部(specifier)の位置に、ゼロ代名詞 *pro* がある¹⁵。このゼロ代名詞 *pro* が動詞からの意味役割(θ -role)を付与される。(18)は動詞が他動詞の場合を想定しているので、主語と目的語に対応する *pro* が二つ必要となる。自動詞の場合は、*pro* は一つとなる。次にその動詞句を Aspect 主要部が補部として選択しアスペクト句(AspP)となり、さらにその AspP を Infl 主要部が補部として選択し全体が Infl 句(IP)となる。アイヌ語の場合は、時制を区別する形態素はないが、相を表わす形態素および法を表わす形態素が豊富にある。ここでは法を表わす形態素が、Infl の主要部に現れると仮定する。アイヌ語のいわゆる「人称接辞(personal affix)」に関しては、Baker (1996)の他の多総合的言語の分析とあわせて、一致(agreement)の要素として表わす。主語の Agr は Infl に、目的語の Agr がある場合は Asp 主要部に、基底から付加(adjoin)されると仮定する(Baker 1996: 31)。付加の方向に関して Baker (1996)は、Kayne (1995)の提案する(19)の原理を採用している。

(19) If X and Y are X^0 categories and X is adjoined to Y in the syntax, then X precedes Y in linear order.

(19)の内容は、(句ではなく)語(X^0)のレベルの要素が他の語のレベルの要素に付加する場合には、常に付加する側の語がターゲットの語の前に現れる語順になるということである。

ここまでで、文の基底構造(伝統的な生成文法でいえば、D 構造)の骨格ができたことになる。1990 年半ば以降の極小主義理論(Chomsky 1995 など)に従って述べれば、個々の要素がそれぞれの選択素性を満たすように、併合(merge)を繰り返し、ボトムアップ式に(18)の構造を組み立ててゆくと仮定することができるが、このあたりの技術的詳細は、以下の議論に直接影響はない。

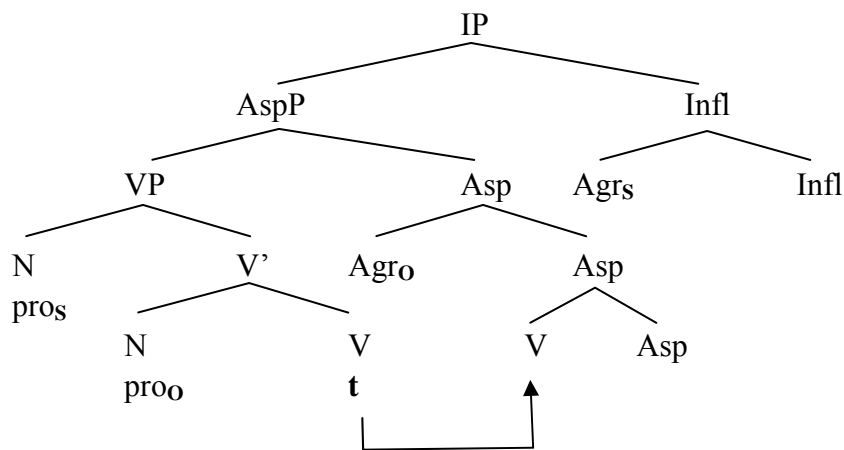
さて次に、動詞的要素の主要部繰上げ移動が起こる。具体的には、V が一つ上の Asp 主要部へ、さらに Asp の主要部(V と複合体となったもの)がさらに一つ上の Infl 主要部へ繰り上がる。この操作の際に、Baker は次のような仮定をしている。

¹⁵ 下つき文字の S と O は、それぞれ「主語」「目的語」に対応するということを明示するために補助的につけたものであり、特に理論的な意味はない。

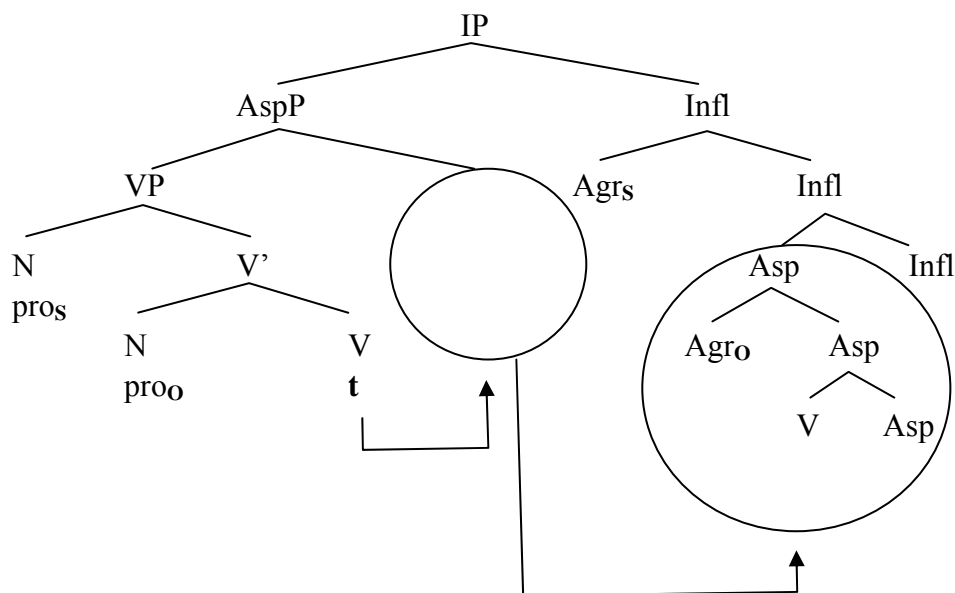
(20) the moved item adjoins not to the left of the target category as a whole, but rather to the head of the target category. (Baker 1996: 32)

(18)の構造で具体的に考えてみると、動詞主要部(V)が繰り上がる際に、 $[_{Asp} \text{ Agr}_O \text{ Asp}]$ という複合主要部全体をターゲットとするのではなく、Asp の主要部だけをターゲットとして、(19)に従ってその左側に付加される。結果として、(21)のように、 $[_{Asp} \text{ Agr}_O [V \text{ Asp}]]$ という複合主要部ができる。さらに、その複合主要部 $[_{Asp} \text{ Agr}_O [V \text{ Asp}]]$ が、繰り上がる際にも、 $[_{\text{Infl}} \text{ Agr}_S \text{ Infl}]$ という複合主要部をターゲットとするのではなく、Infl の主要部だけをターゲットとして、(19)に従ってその左側に付加される。結果として、(22)のように $[_{\text{Infl}} \text{ Agr}_S [_{Asp} \text{ Agr}_O [V \text{ Asp}]] \text{ Infl}]$ という複合体ができる。

(21)



(22)



これが目的語の NI が起こっていない場合の基本的な文構造である。重要なことは、この基本構造の派生を保証するために提案されている原理・仮定は、アイヌ語の文構造だけを生成するためにアドホックに仮定されているものではなく、Baker (1996)で採り上げられ

ている全ての多総合的言語の基本構造が正しく生成されるメカニズムとなっているということである。また、各要素がその選択素性に従って他の要素と併合して句を組み立ててゆくという性質は、多総合的言語のみならず全ての人間言語に見られる普遍的特性である。たとえば、動詞がその語彙的特性に従って、補部位置(complement position)に N(P)を目的語としてとり、指定部位置(specifier position)に N(P)を主語としてとる、あるいは、Asp の主要部が動詞句(VP)をその補部としてとり併合して AspP (アスペクト句) を生成する、という句構造形成の仕組みも言語普遍的なメカニズムであると考えられることができる。したがって、アイヌ語を含む全ての多総合的言語も、多くの部分で他の人間言語と同様の普遍的原理に従っているといえるのである。特に興味深いのは、基本的語順が SVO である言語でも、SOV である言語でも、多総合的言語であれば、最終的に表面に現れてくる基本的な構造が同じであるということを実験的に説明できるという点である。Shibatani (1990: 17)は、アイヌ語が典型的な SOV 言語の特徴を示しているとしながら、「一つの大きな例外的特徴(‘One notable exceptional characteristic’)」として、接頭辞が多く用いられることを指摘している。しかし、ここで提案しているような全ての多総合的言語に当てはまると考えられる基本的文構造と文派生の仕組みを仮定すれば、アイヌ語に接頭辞が多用されるという事実は、決して「例外的 exceptional」な特徴なのではなく、むしろ多総合的言語としてのアイヌ語の標準的な特性であると考えられることができる。

多総合的言語とそれ以外の言語とを大きく分けている根本的な違いは、Baker (1996)の提案に従えば、上記 MVC (17)のパラメータ値の設定方法である。(17)が yes であれば多総合的言語であり、no であれば多総合的言語ではないということになる。上記(18)の構造で具体的に見ると、たとえば、(17-i)を実現するために、Infl の主要部に(目的語がある場合は Asp の主要部にも) Agr が基底で付加されている必要がある。基底の構造において、この Agr が義務的に起こるものが多総合的言語として特徴づけられる言語であるといえるのである。(17-ii)は NI にかかわる部分であるが、それに関しては後述する。

さて、文法の言語普遍的原理を前提とし、さらに(17)のパラメータ値が yes に設定されることによって、アイヌ語を含む多総合的言語の基本構造が正しく生成される可能性を検討しているのであるが、上で見た Baker の(20)はアドホックな仮定に見えるかもしれない。この点に関して Baker は深く論じていないが、次のように考えることによって、(20)をより一般的な文法の普遍原理から導き出すことができるかもしれない。V の Asp への繰上げ移動は、Asp の持つなんらかの素性によって駆動されていると考えることができる(Asp は動詞と一緒にならなければ、その機能を果たすことができない)。V が Asp をターゲットとして移動する際に、Asp には基底ですでに Agr が付加されている。そこで、V が繰り上げ移動をする際の着地点として、Agr が付加された複合体全体に付加される場合と Asp 主要部のみをターゲットとして付加される場合とで、後者の方が V の移動距離が短いと考えることができる。あるいは、Asp が V を引きつける(attract する)と考えると、引きつけた要素を自分を含む複合体の外側に付加するよりも、直接自分に付加するほうが「よ

り経済的な」派生であると考えられることができる。Richards (1997)は、ブルガリア語 (Bulgarian)などの東スラブ系諸言語の多重疑問詞疑問文(multiple *wh*-question)などの分析において、同様の原理が働いているという提案をしている。たとえば、このタイプの言語においては、*wh* 句が複数ある場合、全て文頭に移動しなくてはならないが、その際に次のような語順の現象が観察される。たとえば、(23)のように主語と目的語が *wh* の場合、文頭に現れる語順が必ず「主語—目的語」とならなければならないのである。

- (23) a. koj kogo e vidjal
 who whom AUX seen
 'Who has seen whom?'
 b. *kogo koj e vidjal.
 whom who AUX seen

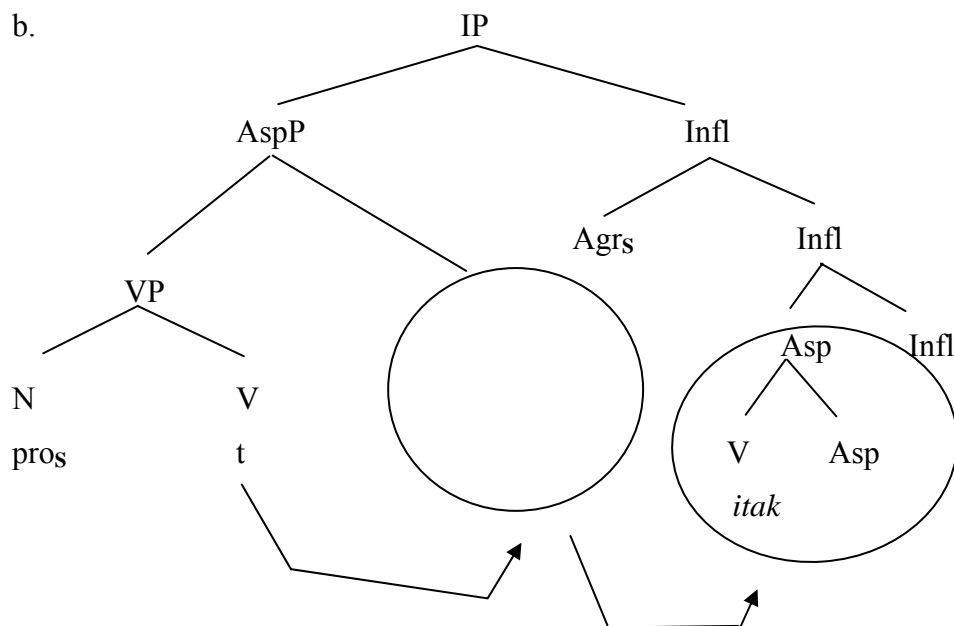
このような事実に対して Richards は次のような説明を与えている。

- (24) a. C [IP koi e vidjal kogo] (基底構造)
 who AUX seen whom
 b. [koj C] [IP ___ e vidjal kogo]. (一つ目の *wh* 句の移動)
 c. [koj kogo C] [IP ___ e vidjal ___]? (二つ目の *wh* 句の移動)
- (Richards 1997: 103ff を参照)

C は疑問詞を文頭に引きつける機能を持つ抽象的な機能範疇である。まず、疑問の C が自分の c 統御領域内 (すなわち、(24a)では[IP]の内部) から *wh* 句を探す。koj 'who'が最初に見つかるのでそれを自分の指定部の位置に引きつける(24b)。このタイプの言語では、C は *wh* 句を複数回引きつけることができるので (英語では一回のみ)、C は再び *wh* 句を探す。すると今度は kogo 'whom'が見つかるので、それをふたたび自分の指定部位置まで引きつける。この際に、kogo をすでにある koj の外側まで引きつけるよりも、C の直前に引きつける派生の方が、kogo の移動距離が短く、より経済的であると考えられることができる。よって、二つ目の *wh* 句は結局、最初に動いてきた koj と attractor 主要部である C との間に「入り込む(tuck in)」のである。この仕組みの技術的な詳細に関しては、さまざまな可能性が提案されているが、ここでは直感的な理解で十分であろう。すなわち、すでに一つの要素が付加されているある主要部に、二つ目の要素が移動により付加される場合には、二つ目の要素は先に付加された要素と主要部 attractor との間に「入り込む」という現象が、文法の普遍原理によるものであると考えられるのである。もし、この考え方が正しいとすると、(20)をアドホックに仮定する必要はなく、(20)の効果は文法の普遍原理からの帰結であると言える。

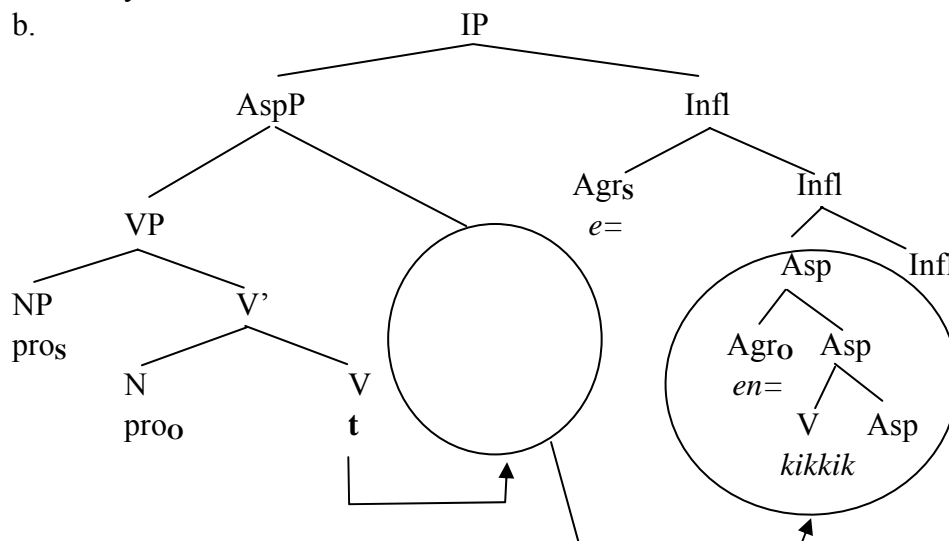
それでは、(22)の基本構造を前提に、いくつかのアイヌ語の具体例を考えてみよう。主語が三人称で文中には明示的に現れず、動詞は自動詞、さらに Asp や Mood にも明示的な形態素が現れない場合、形態的に表に現れてくるのは、動詞だけである。たとえば、上記の基本構造(22)の V の位置に itak ‘speak’が現れ、主語は he/she/they にあたるゼロ代名詞 pro_S となる（目的語 pro_O はこの場合ない）。三人称の一致形態素はゼロ形態であるので、 Agr_S も発音されない。結果として(25a)は、(25b)の構造となる。

(25) a. itak ‘he/she/they speak’ (Shibatani 1990: 25)



他動詞の場合は、動詞句内に主語のゼロ代名詞 pro_S と目的語のゼロ代名詞 pro_O が現れる。そして、Infl に付加されている Agr_S が主語との一致を示し、もし主語が二人称である場合は $e=$ （お前が）あるいは $es=$ （お前たちが）として現れる。また Asp に付加されている Agr_O が目的語との一致を示し、目的語が一人称の場合は、 $en=$ （私を）あるいは $un=$ （私たちを）として具現される。いま、たとえば動詞を *kikkik*（たたく）とし、Asp や Mood の要素がない場合には、(26)の構造となる。

- (26) a. e=en=kikkik
you=me=hit (井筒 2006: 33)
- b.



直感的な述べ方をすれば、主語や目的語のゼロ代名詞 *pro* は動詞句内の指定部あるいは補部位置に現れ動詞の持つ θ 役割を与えられる。ここまでは、他の全ての言語と同様である。しかし、多総合的言語は「形態的可視条件(MVC)」(17) (以下に(27)として再録)のパラメータ値が *yes* であるので、それだけでは、ゼロ代名詞 *pro* は意味解釈上正しくライセンスされない。

(27) *The Morphological Visibility Condition (MVC)*

A phrase X is visible for θ -role assignment from a head Y only if it is coindexed with a morpheme in the word containing Y via:

- (i) an agreement relationship, or
- (ii) a movement relationship.

(Baker 1996: 17)

そこで、ゼロ代名詞 *pro* は動詞複合体に含まれる一致形態素(Agr)と同一指標を与えられていることによって、意味解釈上可視(visible)な要素としてライセンスされるというのが、多総合的言語を特徴づけている文法の原理であるという提案である。すなわち、*pro* と同一指標を与えられている一致の形態素が、動詞複合体の一部に含まれていなければ、*pro* は意味解釈上正しくライセンスされないことになる。

さてここで、動詞句内の項位置(argument position)に、ゼロ代名詞 *pro* ではなく発音される名詞(句)が現れることができないのはなぜかを考えてみよう。この位置の項がゼロ代名詞 *pro* でなくてはならないことも、原理的に説明できると Baker は論じている。まず、第一に、MVC によって一致の形態素は義務的であるのが、多総合的言語の特徴(というより、定義)である。次に、文法格(grammatical Case)は機能範疇によって与えられると仮定する。ちょうど、英語の主格が Infl によって主語位置に与えられるように、多総合的言語でも Infl が主格を与える。目的格に関して、Chomsky (1995)にならい動詞が直接与え

るのではなく、機能範疇が与えると仮定する。この場合具体的には Asp が目的格を与える
と仮定する。次に、それぞれの機能範疇に義務的に付く一致の形態素が、その文法格を付
与される（あるいは吸収(absorb)する）と仮定する。これはちょうど、英語の受身の形態
素-en が目的格を吸収するのと同じ考え方である(Baker, Johnson, and Roberts 1989)。最後に、
格フィルター(Case Filter)を仮定する。すなわち、「項位置に現れる音声を持つ名詞（句）
は、S 構造で格を付与されていなければならない」という条件である(Chomsky 1981)。以
上を仮定すると、多総合的言語において、動詞句内の項位置には、ゼロ代名詞しか現れる
ことができないという事実が自然と説明される。すなわち、動詞句内の項位置には、（動
詞の特性に従い他動詞なら二つ、自動詞なら一つ、など） θ 役割が与えられる。したがっ
て、それを受け取る項がなくてはならない。文法格は一致の形態素に吸収されてしまっ
ているので、音声的に具現された名詞句が項位置に現れても、格が与えられず、格フィルタ
ーの違反になってしまう。格フィルターに違反せずに、 θ 役割を正しく受け取る要素とし
て、残っている可能性はゼロ代名詞しかない。このように考えることによって、動詞句内
の項位置の要素が、常にゼロ代名詞であるということが原理的に説明できると Baker は論
じている。このモデルにおいて、発音される名詞句は（NI の場合を除き）IP に付加され
た非項位置(non-argument position)に現れていると仮定される¹⁶。

では次に、形態的可視条件(MVC)のもう一方の要件(27-ii)を考えてみよう。これは、名
詞句が NI によって可視的となり正しくライセンスされるということである。すなわち、
多総合的言語においては、動詞の項が正しくライセンスされるためには、NI が起こって
いるか、動詞に一致形態素が現れているか、どちらかが必要であるということである。ま
ず、モホーク語の例を見てみよう。

¹⁶ したがって、Baker の理論では多総合的言語の文中に現れる音形を持った項となる名詞句は（NI さ
れている場合を除き） θ 役割も文法格も直接与えられる位置には現れていないことになる。そのよう
な IP に付加された位置に現れている名詞句がどのように認可されるのかについては、Baker はロマ
ンス語の「接語左方移動構文(Clitic Left Dislocation: CLLD)」と同様の分析が当てはまると提案している。
音形を持った名詞句が IP に付加され、それと同じ θ 役割を共有する代名詞（ロマンス語の場合には発
音される接語代名詞で、多総合的言語の場合にはゼロ代名詞）が IP 内にあり、それによって認可され
るという点で、両者は共通であると考えることができる。したがって、ロマンス語の CLLD の音形を
持った名詞句を認可するのと同様の仕組みが、多総合的言語の音形を持つ項名詞句の認可にも応用で
きるという理論である。

(i) *The Adjunct Licensing Condition*

An argument-type phrase XP generated in adjoined position is licensed only if it forms a chain with a
unique null pronominal (or trace of head movement) in an argument position.

(Baker 1996: 312)

Baker のこの分析の詳細な紹介、及びそのアイヌ語への応用の詳しい検討は、残念ながら本稿では行う
余裕がない。今後の課題としたい。

(28) a. * Ra-núhwe'-s ne owirá'a.

M_SS-like-HAB NE baby

'He likes babies.'

b. Shako-núhwe'-s (ne owirá'a).

M_SS/3_{PO}-like-HAB (NE baby)

'He likes them (babies).'

c. Ra-wir-a-núhwe'-s.

M_SS-baby-like-HAB

'He likes babies.'

d. *?Shako-wir-a-núhwe'-s.

M_SS/3_{PO}-baby-like-HAB

'He likes babies.'

(Baker 1996: 21)

(28a)は目的語の一致がなく、NI も起こっていないので、MVC を満たしておらず、非文となっている。(28b)は NI 起こっていないが、目的語一致が起こっているので、MVC を満たし文法的な文になっている。一方、(28c)では目的語一致は起こっていないが、NI が起こっているので MVC を満たし、文法的な文になっている。(28d)に関しては、NI と目的語一致の両方が起こっていることが非文の理由と考えられるが、これは MVC を満たしていないからとは考えられない。事実、たとえば、南チワ語では、(29)に示すように目的語 (seuan 'man')の NI と目的語一致 (bi-は一人称単数主語一致と三人称複数目的語一致の複合形態) が同時に起こっても文法的である。

(29) Bi-seuan-mū-ban.

1_SS/3_{PO}-man-see-PAST

'I saw the men.'

(Allen *et al.* 1984: 295)

したがって、目的語の NI と目的語一致が同時に起こることを許すかどうかは多総合的言語の中でもパラメータ化されている可能性がある。

アイヌ語に関しては、三人称の一致が形態的に明示されないので、NI と目的語一致との関係が、モホーク語タイプ (つまり、NI と目的語一致の共起は不可能) であるのか、南チワ語タイプ (つまり、NI と目的語一致の共起が可能) であるのかの判断は難しい。

ただし、次のような論理に従えば、確認することが可能かもしれない。前節で一人称複数主語の一致形態 an=や ci=が、一人称複数主語一致と三人称目的語一致の複合形態である可能性を論じた。もしこの分析が正しいとすると、この場合には三人称の目的語一致が形態的に存在することになる。そこで、an=または ci=を用いて、目的語の NI が起こっている例が見つかれば、アイヌ語はこの点に関して南チワ語タイプ (つまり、NI と目的語

の一致形態の共起が可能)であると判断できる。逆に、an=または ci=を用いた場合には、NI が不可能であることが確認できれば、アイヌ語はこの点に関してモホーク語タイプ(つまり、NI と一致の共起が不可能である)ということになる。次の(30)は、アイヌ語が南チワ語タイプであることを示唆している例と解釈できるかもしれない。

(30) A-mukcar-tuye

1SG-chest-cut

‘I cut his chest’

(Shibatani 1990: 64)

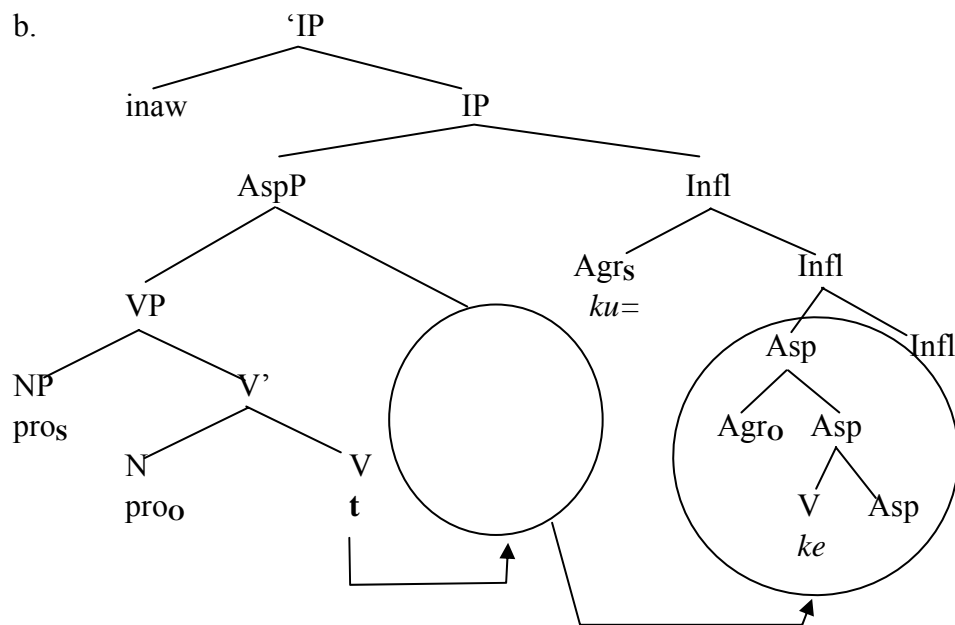
この点に関しては、方言差もあるかもしれない、慎重な検証が必要であると思われる。

最後に、NP が NI されずに明示されている場合の構造について考えてみよう。多総合的言語において、NI されていない名詞句は、IP に付加されていると Baker は提案している。したがって、(31a)の構造は(31b)のようになる。

(31) a. inaw ku=ke

inaw 1SG=make ‘I make inaw’

b.



NI されていない名詞句は、IP に自由に付加できる、というのが Baker (1996)が検討しているほとんどの多総合的言語の特徴である¹⁷。たとえば、モホーク語では SVO が基本語順とされているが、SOV、VSO、VOS も基本的に可能である。前の文脈からの談話上の要件により、どの語順がより自然であるかが決まるようであるが、文レベルでの文法としては、どの語順も許される。IP への自由付加を認めることにより、この特徴を説明するという提案である。しかし、アイヌ語に関しては、語順の制限は他の多総合的言語よりも厳し

¹⁷ 上記、注 15 の議論も参照。

いかかもしれない。Shibanani (1990)は、‘Ainu is a so-called SOV language’と述べており、井筒 (2006: 8)は、主語も目的語も三人称である例文を用いて、NP NP V の場合、最初の NP が主語、二つ目が目的語として解釈され、その逆の解釈はかなり難しいと述べている¹⁸。

最後に、動詞語幹と相や法を表わす「助動詞」的要素にかかわる部分の構造について簡単に触れておく。たとえば、上記(31b)の構造からも明らかのように、「(人称一致+) 動詞+相+法」は、全体として語(X^0)のレベルで Infl に組み込まれ、一つの大きな複合語 (complex word)をなしている。つまり、句レベル(phrasal level)の構造になっているわけではないという提案である。モホーク語をはじめとする典型的な多総合的言語では、形態論的特徴からも、動詞+助動詞が複合語となっていることが確認できる場合が多い。しかし、アイヌ語では、少なくとも標準的な表記法では、相を表す要素や法を表わす要素を独立の語彙要素として(分かち書きで)表わす(たとえば、上記(13)を参照)。これは、再帰を表わす形態素 *yay-* や使役を表わす形態素 *-re* が、動詞に形態的に組み込まれた形で表記されるのが一般的であるという事実と対照的である。これに関しては、動詞と相や法の助動詞的要素の間(あるいは、相と法との間)に、他の要素(様態を表わす副詞など)が入り込むことが、基本的にはないと考えられることから、アイヌ語の法や相を表す要素が統語形態的独立の語であることを強く示す証拠はないように思われる。また、アイヌ語で、これらの要素が独立の語のように見えるのは、日本語のような膠着言語や他の典型的な多総合

¹⁸ IP への名詞句の自由付加による自由語順に関して、井筒(編)(2007: 439-440)に興味深い事実が報告されている。アイヌ語では通常、主語、目的語、副詞類など全ての要素が動詞部の前に現れるが、それらが動詞部の後に現れる場合がある。

- (i) ... noyporo etara nea op ki 「その額にささった、その槍は」
 その額に ささる その 槍 した

この *ki* は本動詞としての「~をする」と同形態であり、このような構文に現れる場合は、一種の代動詞(pro-verb)であるという分析が一般的であるようだが、項(i)の場合は、「その槍」への θ 役割は明らかに先行詞となっている動詞(*etara*)からのものを引き継いでいる。この点は、(ii)のような英語の Pseudo-gapping と共通しているかもしれない。

- (ii) John will eat the apple, and Mary will the orange.

一方で、等位接続構造となっており、二つの節で別々の命題を述べている英語の pseudo-gapping とは異なり、アイヌ語の(i)では動詞部の後の要素も含めて全体で一つの命題を表す文となっているので、その点に関しては別の分析が必要である。アイヌ語では修飾節が被修飾語の前に来るという典型的な主要部末端型の名詞句構造となっている。そのため、もし(i)で *ki* がなければ、全体を *op* を主要部としそれに関係節のついた名詞句であると誤分析されてしまうかもしれない。*ki* はそのような誤分析を避けるための特別なマーカーであるとみなすこともできるかもしれない。もし、*ki* がアイヌ語の「右方転移構文(Right dislocation)」をライセンスする何らかのマーカーであるという分析が可能であれば、(i)のような構文は、多総合的言語の特徴の一つである自由語順の表れ一つと解釈することも可能である。この「代動詞」とされている *ki* の機能を含め、(i)のような構文は、言語類型論的にもかなり特異な構文であると思われるが、アイヌ語でこのような構文が許されるということと、IP への項の付加が基本的には自由であるという多総合的言語の基本的特性との間に、原理的な関連があるかどうかは、今後の重要な研究課題である。

的言語のような「連声(sandhi)」¹⁹があまり頻繁に起こらないことが原因かもしれない。したがって、「動詞+相+法」が語レベルの複合形態になっていると考えても、特に問題はないと思われる。

以上、Baker の提案する MVC のパラメータという観点から見た、多総合的言語の基本的構造の特徴の一部を、アイヌ語のデータにも当てはめながら紹介した。

4. アイヌ語はどの程度「多総合的」か

第3節では、アイヌ語が、Baker (1996)の提案する理論的な定義に照らし合わせて、多総合的言語の一つであると仮定した場合に、どのような基本構造を持っているかを示してみた。いくつかの文法的特徴は、アイヌ語が多総合的言語の一つであることを示していると解釈することができる。たとえば、(一人称と二人称に限れば)主語の一致と目的語の一致(伝統的なアイヌ語研究では「人称接辞」と呼ばれている)が動詞につく形態素として義務的に現れる。それらは基本的には接頭辞である。また、統語的 NI が観察できる。さらに、動詞+動詞接辞+相+法という順序で形態素が現れる、などである。一方で、モホーク語に代表されるような典型的多総合的言語とは異なると思われる特徴もアイヌ語には少なくない。一つには、三人称の一致は形態的には(ほとんど)現れてこない。また、名詞句の語順に関しても、他の多総合的言語に比べ、はるかに自由度が低いように思われる。理論に基づいた類型論の観点から見て、このようなアイヌ語の特徴をどのようにとらえたらよいであろうか。アイヌ語は基本的には、Baker の定義する理論的な意味での多総合的言語であり(すなわち、MVC のパラメータ値は yes と設定されており)、典型的多総合的言語の特徴からはずれると思われる現象は、何らかの補助的な文法的条件により説明されるのかもしれない。あるいは、逆に、文法原理のパラメータ値の根本部分で、アイヌ語は他の多総合的言語とは異なっており、他の多総合的言語と共通であるように見える文法的特徴は、偶然の一致である(少なくとも、MVC からの帰結ではない)のかも知れない。Shibatani は(32)のように述べているが、具体的に文法の根本原理のどの部分がどのように異なっているかは、今後、丁寧に明らかにしていかなければならない課題である。

(32) Ainu, ..., offers a case of metamorphosis from a polysynthetic language to an analytic language. (Shibatani 1990: 18)

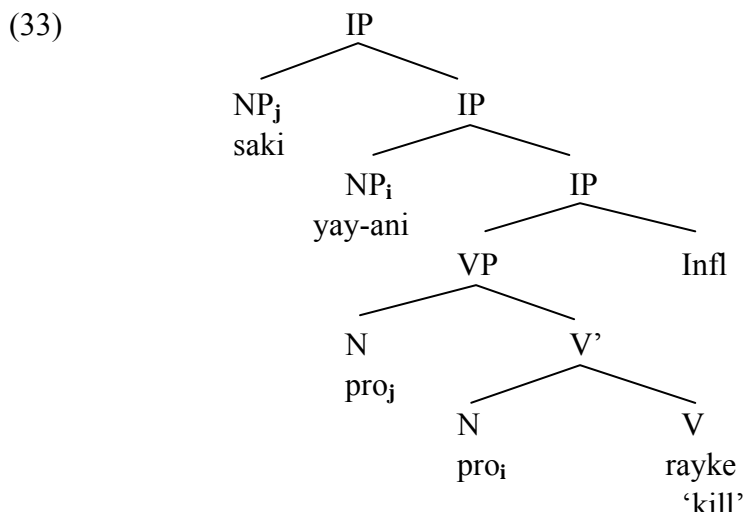
以下本節では、Baker (1996)の理論上の予測が、どの程度アイヌ語の他の特徴に当てはまるかを、いくつかの具体例に焦点を絞って検討してみる。

4.1 単語としての再帰代名詞がないこと

まずはじめに、アイヌ語に「自分を」「彼自身を」などに対応する独立の単語としての

¹⁹ 語と語が結合された場合に、語頭や語尾の音が変化(あるいは消失)する現象。

照応表現(lexical anaphor)として、yay-ani/ani-yay (him-self)が仮に存在すると考えてみよう。それを本稿で仮定しているアイヌ語の基本構造の骨格に入れてみると(33)のようになる。いま、議論に必要なでない部分は簡略化して書いてあるが、ポイントは、動詞句(VP)内に主語と目的語に対応するゼロ代名詞があり、発音される名詞句は IP に付加された位置に現れるということである。



発音される主語 saki と動詞句指定部のゼロ代名詞 pro は定義上、同一指標を与えられる。発音される目的語と動詞句内の目的語ゼロ代名詞も同一指標を与えられる。さて、yay(-ani)は定義上照応形(anaphor)であるので、(34)の束縛条件 A (Binding Condition A)に従わなければならない(Chomsky 1981)。したがって、この構造では目的語名詞句を c 統御している主語 saki と yay(-ani)は同一指標を与えられなければならない。

(34) 束縛条件 A

- a. An anaphor must be bound within its minimal clause.
- b. α binds β iff α c-commands β , and α and β are coindexed.

結果として、(33)では $j = i$ となる。ところが、そうすると今度は結果として動詞句内の pro 主語と pro 目的語も、同一指標を持つことになってしまう。しかし、それは(35)の束縛条件 B (Binding Condition B)に違反することになる。

(35) 束縛条件 B

- A pronominal must not be bound within its minimal clause.

目的語位置の pro は主語位置の pro に c 統御されているので、この二つの pro に同一指標を与えられると束縛条件 B の違反になってしまうのである。すなわち、(33)の構造で、束

縛条件 A を満たそうとすると束縛条件 B の違反となり、主語と目的語に異なる指標を与えることによって束縛条件 B を満たそうとすると、今度は束縛条件 A の違反になってしまうのである。したがって、語彙的照応形が文中に現れると、その構造は必ず文法の原理に違反することになってしまう。このように考えることによって、アイヌ語に独立の目的語として機能する語彙的照応表現が存在しないという事実が原理的に説明できる。アイヌ語で(33)のような意味を表わす場合には、再帰的要素 *yay-*が動詞に接辞化し、動詞を自動詞化した(36)のような表現になる²⁰。

(36) *saki yay-rayke* サキは自分を殺した(自殺した)

saki SELF-kill

この説明は、相互的(reciprocal)概念を表わす接頭辞要素 *u-*にも同じように適用できる。興味深いことには、Baker (1996)が検討している全ての多総合的言語において、同じように、語彙的に独立の語として機能する照応形が存在せず、照応形態素が動詞に接辞化しているのである。

ところで、いわゆる多総合的言語でなくても、再帰的な意味や相互的な意味を持つ形態素が動詞に組み込まれた自動詞として表現されることはある。しかし、そのような言語では、語彙的に限られた表現があるだけで、全ての他動詞に当てはまるわけではない。たとえば、日本語では「自分を推薦する」の他に「自薦する」という自動詞的表現もある。これは、再帰を表わす形態素「自」が動詞に組み込まれ自動詞化していると考えられるかもしれない。しかし日本語におけるこのような表現は、一定の(おそらくは漢語的)表現に限られ、たとえば「自分をほめた」を「*自ほめた」とはいえない。

アイヌ語及び他の多総合的言語において語彙的照応形が存在しないのは、語彙上の偶然ではなく、MVC のパラメータ値が *yes* に設定されているという基本的な文法的特徴からの必然的帰結であると考えられるのである。さらにこの点に関して、Baker (1996)は興味深い議論をしている。大部分のバンツー諸語(Bantu languages)で再帰性や相互性を現す形態素は動詞に形態的に組み込まれているが、バンツー諸語は MVC のパラメータ値が *no* であるので、ここで定義される意味での多総合的言語ではない。したがって、再帰性や相互性を表す独立の名詞表現がないのは、文法の原理による必然的な結果ではないことになる。もしそうであれば、バンツー語族の中の言語が言語接触や歴史的変化によって語彙的照応形を獲得するということも起こりうると予測される。そしてこの予測は正しいと思われる報告がある。Baker によると、スワヒリ語のチムウィーニ方言(Chimwiini)は(西洋言語との接触が原因なのか)動詞に接辞化している照応形態素の他に、語彙的

²⁰ 現在の標準的なアイヌ語表記法では、*yay-*が接辞化された場合、動詞語根との間にハイフンは入れずに一語として表記されることが多いが、ここでは、形態的な構成を明示するためにハイフンを入れてある。

照応形も使われるようになってきているという。

日本語との言語的、文化的接触が歴史的にも小さくないアイヌ語には、さまざまなレベルで日本語の語彙が入り込んできている。そして日本語には独立の目的語として現れる語彙的照応形「自分を」「お互いを」などがある。それにもかかわらず語彙的照応形がアイヌ語に入り込んできていないとすれば、アイヌ語の文法の根本的原理がそれを妨げていると考えるのが合理的な説明である。すなわちこの点において、アイヌ語は MVC パラメータの値が yes であり、語彙的に独立の照応形を原理的に許さない真性の多総合的言語であると考えることができる。

4.2 真の量化表現の欠如

イタリア語において、量化表現(quantifier)の左方転位(Left Dislocation)は非文法的となる (Rizzi 1986: 395)。

- (37) a. *Nessuno, lo conosco in questa citta
 Nobody, him I-know in this city
 ‘I know nobody in this city.’
 b. * Tutto, lo dire’ alla polizia
 Everything, it I-will-say to-the police
 ‘I will say everything to the police.’

ここで問題となっているのは、代名詞的接語(pronominal clitic)の lo の存在である。その証拠に lo を使わない topicalization の文は、(38)に示すとおり文法的である。

- (38) a. Nessuno, conosco ___ in questa citta
 Nobody, I-know in this city
 ‘I know nobody in this city.’
 b. Tutto, dire’ ___ alla polizia
 Everything, I-will-say to-the police
 ‘I will say everything to the police.’

(38)では、下線部分に Nessuno ‘nobody’や Tutto ‘everything’に束縛される変項として解釈される痕跡(trace)があると仮定される。そこで Rizzi は(37)と(38)の対比を説明する原理として、(39)を提案している。

- (39) A pronoun cannot be locally bound by a ... quantifier. (Rizzi 1986: 395)

これは言語普遍的な原理の一つであると考えることができる。たとえば、(40)に見られるようないわゆる「弱交差現象(weak crossover effect)」も同様の原理で説明できるからである。

- (40) a. Who does his mother love?
 b.* [Who_i does [_{IP} his_i mother love t_i]]?

(40a)において、his を who に束縛される変項として解釈することはできない。量化表現である who に his が局所的(local)に束縛されることになり、(39)に違反するからである²¹。「局所的に」とは who と his の間に who に束縛される別の変項が介在していないということである。一方で、(41a)は his が who に束縛される変項という解釈でも完全に文法的な文である。

- (41) a. Who loves his mother?
 b. [Who_i [_{IP} t_i loves his_i mother]]?

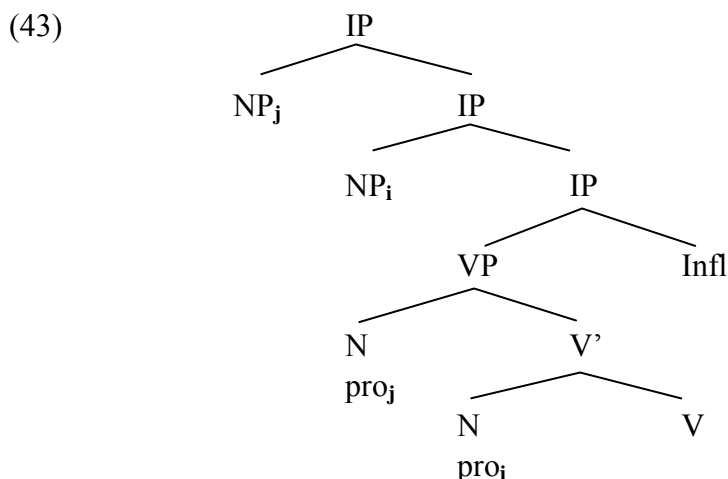
主語の wh 句も、(string-vacuous ではあるが)基底の主語位置(IPの指定部)からCPの指定部へ移動しているという標準的な仮定に従うと、(41a)の構造は(41b)のように表示することができる。この構造では who の痕跡(t_i)が his を束縛しているので、his は量化表現 who によって直接局所的に束縛されているわけではない。よって(41)は(39)に抵触しないのである。ここまでを一般化すると次のようにまとめることができる。

- (42) 代名詞が量化表現の束縛変項として解釈されるためには、その量化表現によって直接的にライセンスされるのではなく、その量化表現の痕跡などによって間接的に(あるいは寄生的(parasitically)に)ライセンスされなければならない。

以上のことを念頭置いて、多総合的言語の構造を考えてみよう。

Baker (1996)の提案する構造に従えば、多総合的言語は動詞句内に主語や目的語に対応するゼロ代名詞があり、形態的に独立の名詞(句)が現れる場合にはそれらは IP に付加される、という(43)の構造になっている。いま、議論に直接かかわりのない詳細は簡略化した形で構造を示している。

²¹ (40a)は、his が who に束縛されない解釈(たとえば、his はトムを指し、「トムの母親は誰を愛しているか」という解釈)であれば、問題のない文法的な文である。



もし、IP に付加された NP 位置に英語の every や nobody/nothing のような量化表現が現れると、それは動詞句内の対応するゼロ代名詞を局所的に束縛することになってしまい、(39)の原理に違反することになる。したがって、(39)が言語普遍的原理であり、多総合的言語の基本構造が(43)であるならば、多総合的言語には真性の量化表現は存在しないという予測が成り立つ。Baker (1996)はモホーク語においてはこの予測が正しいと論じている。そして、他の多総合的言語においても当てはまる可能性が高いと論じている。アイヌ語に関しては、信頼できるデータが不十分であるとして Baker は結論を保留している。以下では、まず初めにモホーク語及びその他いくつかの多総合的言語についての Baker の議論を概観し、次にアイヌ語についてこの考え方がどの程度当てはまるかを検討してみる。

4.2.1 普遍量化(universal quantification)

Baker (1996)によると、英語の everyone や everything を含む文をモホーク語に直す場合、母語話者は必ず、akwéku という要素を使う。

(44) a. John akwéku wa-shakó-kΛ-ʔ.

John all FACT-MsS/3O-see-PUNC

‘John saw everyone.’

b. Akwéku we-hó-[a]ti-ʔ,

all FACT-MsO-lose-PUNC

‘He lost everything.’

(Baker 1996: 54)

Baker は証拠を挙げて、この akwéku は英語の「集合的 all (collective all)」に対応するものであり、通常の名詞句(definite noun phrase)と同じ性質持つものである。したがって、「真性の量化表現(true quantified NPs)」ではないと論じている(Baker 1996: 57)²²。

²² 「真性の量化表現」は、集合的 all などと異なる文法的特性を示すことが知られている。たとえば、次の(ia)で every man は his の先行詞となることはできない(いわゆる弱交差現象(weak crossover effect))のに対して、(ib)では their の先行詞を all critics とする解釈が可能である。

モホーク語の akwéku に関して、Baker が挙げている証拠の一つとして、akwéku が英語の all と同様に、文法上複数形の振る舞いを示すことを挙げている。すなわち、alwéku+N の N は常に複数形となること(45a)、akwéku を項とする動詞は複数形の一致を示すこと(45b)、そして akwéku が先行詞となる場合の代名詞は常に複数形となること(45c)である。

- (45) a. Wa'-e-nóhare-' akwéku ka' sere-shú'a.
FACT-FsS-wash-PUNC all car-PL
 'She washed all the cars.'
- b. Akwéku wa-hoti-yéshu-' (*wa-ho-yéshu-')
all FACT-MpO-laugh-PUNC (*FACT-MsO-laugh-PUNC)
 'Everybody laughed.'
- c. Akwéku wa'-ti-shakoti-noru'kwányu-' ne roatí-share'.
all FACT-DUP-MpS/3pO-kiss-PUNC NE MpP-friend
 'All of them kissed their friends.' (Baker 1996: 55)

さらに、akwéku は(46)に示すとおり、弱交差現象を示さない。

- (46) Raoti-[i]tshenΛ-shú'a wa-huwatí-hser-e' akwéku tsiy-ksa'-okú'a.
MpP-pet-PL FACT-3pS/MpO-follow-PUNC all MpS-child-PL
 'Their pets followed all of the boys.' (Baker 1996: 57)

したがって、モホーク語の akwéku は、英語の all に対応する機能を持っており、真性の普遍量化表現 every に相当する表現ではないといえることができる。

他の多総合的言語については、たとえば Launey (1981)が古典ナワトル語(classical

- (i) a. *His mother loves every man.
(≠ For all x, x a man, x's mother loves x)
 b. Their readers expect all critics to be boring. (Baker 1996: 55)

また、よく知られた現象として、普遍量化詞の作用域はそれが含まれる最小の節の外側には及ばないという事実がある。たとえば、(iia)では、普遍量化詞 every はそれを含む関係節の外側までその作用域を広げることにはできない。したがって、it を every book in the library に束縛される変項として解釈することはできない。それとは対照的に、(iib)では、they と all the books in the library とを同一指示で解釈することができる。

- (ii) a. * The guy who read every book in the library says that it is boring.
 b. The guy who read all the books in the library says that they are boring. (Baker 1996: 56)

さらに、every は文法上単数として振舞うが、all は文法上複数として振舞うことができるという点でも両者の文法的特性は異なる。

Nahuatl)が持つ複数の普遍量化表現は全て、複数形としての文法的な振る舞いをする例を報告している。この点においては、古典ナワトル語の当該の表現は、英語の every タイプではなく、モホーク語と同様の特性を持っていると考えることができる可能性がある。

アイヌ語は(モホーク語や英語とは異なり)、名詞(句)の形や、動詞の一致形態において、単数複数の区別が体系的に現れてくる言語ではない。したがって、上記の論理をそのままアイヌ語に当てはめるのは慎重でなくてはならないであろう。しかしながら、次のようなテストケースによってある程度の検証は可能となる。

井筒(2006)によると限られた数の自動詞に、形態の異なる単数形・複数形の区別が存在する。たとえば、「ある・いる・暮らす」は主語が単数形の場合は an で、主語が複数形の場合は oka(y)で表わされる。そこで、every/all に対応する名詞(句)を主語とした場合、an をとるのか oka(y)をとるのかで、その名詞句が文法的に複数として機能しているのか、単数として機能しているのかが確認できる。さらに、アイヌ語のいくつかの名詞は、単数形に対する複数形を持っているものもある。そこで、every/all に対応する表現が単数形の名詞につくか複数形の名詞につくかによって、英語の every に対応する機能を持つか、all に対応する機能を持つかを確認できる。

アイヌ語において、every/all に対応すると思われる表現として、少なくとも次のような表現が考えられる²³。

(47) a. 名詞(句) + opitta

例: aynu opitta ray

人 皆 死ぬ 「人々は皆死んだ」 (井筒 2006: 25)

b. nen ne yakka

誰 NE ても

例: nen ne yakka pirka 「だれでもいい」 (田村 1977: 158)
よい

opitta を用いた文としては、次のような例が確認できる。

(48) a. ekattar opitta tustekno okay (Izutsu 2004: 149 [1218101])

子どもたち 皆 黙ったまま いる

「子どもたちは皆 黙ったままだった」

b. aynu opitta kimatek kor okay yak an=_ye (Izutsu 2004: 145 [1207502-1207503])

人 皆 驚く~しながらいる COMP 我々=いう

「人は皆驚いていたと我々は言った」

²³ (47b)は、日本語の訳からも分るとおり、everyone / all という意味よりも、anyone / whoever のような conditional な意味を含意するかもしれず、別の扱いが必要かもしれない。

(48a)で興味深い点は、まず *opitta* が修飾している名詞 *ekattar* (子どもたち) が *ekaci* (子ども) という単数形の名詞に対する複数形であるという点、さらに動詞が単数主語を要求する *an* (いる) ではなく、複数主語を要求する *okay* (いる) であるという点である。(48b)でも、*aynu opitta* (人+皆) という主語に対して *okay* が動詞として使われている。このことから、少なくともアイヌ語の *opitta* (井筒(2006)では「数量表現(quantifier)」と分析されている) は、英語の集合的 *all* に対応し、*every* のような真性の量化詞ではないと考えることができそうである²⁴。

4.2.2 否定量化(negative quantification)

英語の *nobody*、*nothing* に当たる表現として、モホーク語ではそれぞれ *yahúhka* と *yah thénΛ* がある。これらは、形態的に *yah* ‘not’ と *úhka* ‘someone’ 及び *yah* ‘not’ と *thénΛ* ‘something’ に分けることができる。

- (49) a. *Yah te-shakó-kΛ-φ* *úhka*.
 not NEG-MsS/FsS-see-STAT someone
 ‘He saw nobody.’
- b. *Yah thénΛ* *th-a-ye-hnínu-’*.
 not something CONTR-OPT-FsS-buy-PUNC
 ‘She will buy nothing; she won’t buy anything.’ (Baker 1996: 59)

これらの例から、*yahúhka* や *yahthénΛ* は英語の *nobody/nothing* のような否定量化名詞句 (negatively quantified NP) ではなく、不定の名詞 (句) (indefinite NP) *úhka* や *thénΛ* が、文否定辞 *yah* の作用域に現れていると分析されるものである、と Baker は論じている。

アイヌ語も同様の分析が可能であると思われる。すなわち、英語の *nobody/nothing* に対応する表現は、不定の名詞 (句) *nen ka* ‘somebody’ や *nep ka* ‘something’ が文否定の要素の作用域に現れていると分析できる。

- (50) a. *nen ka isam* 「誰もいない」 (井筒 2006: 255)
 誰 KA いない
- b. *nep ka wen* *puri ku=sak* *pe ora* 「何も悪いことをしていないのに」
 何 KA 悪い 行い 1sS=持たない の に (田村 1977: 158)

²⁴ 名詞 + *opitta* という表現が、真性の量化表現 (英語の *every* に対応する機能を持つ) ではなく、英語集合的 *all* に対応するものであるとすれば、弱交差現象を示さないと予測される。残念ながら、この点に関しては、データからの確認ができていない。

(50a)の動詞 *isam* は「存在しない」「存在しなくなる」(井筒 2006: 213)という否定の意味を内包した自動詞であり、(50b)の動詞 *sak* は「～がない」「～を持っていない」という否定の意味を内包した他動詞で、どちらも固有名詞や定の名詞(句)を主語(や目的語)とすることもできる。上の第3節で論じたように、動詞が構造上一番上の範疇(Infl)の主要部まで繰り上がっているとすれば、*isam/sak* に内在する *negative force* が文全体を作用域にとると仮定することも可能となり、(50)の意味とも形式的に合致する。

nen ka / nep ka は否定要素 *somo* と共起することによっても、*negatively quantified NP* と同じ意味機能を果たす。

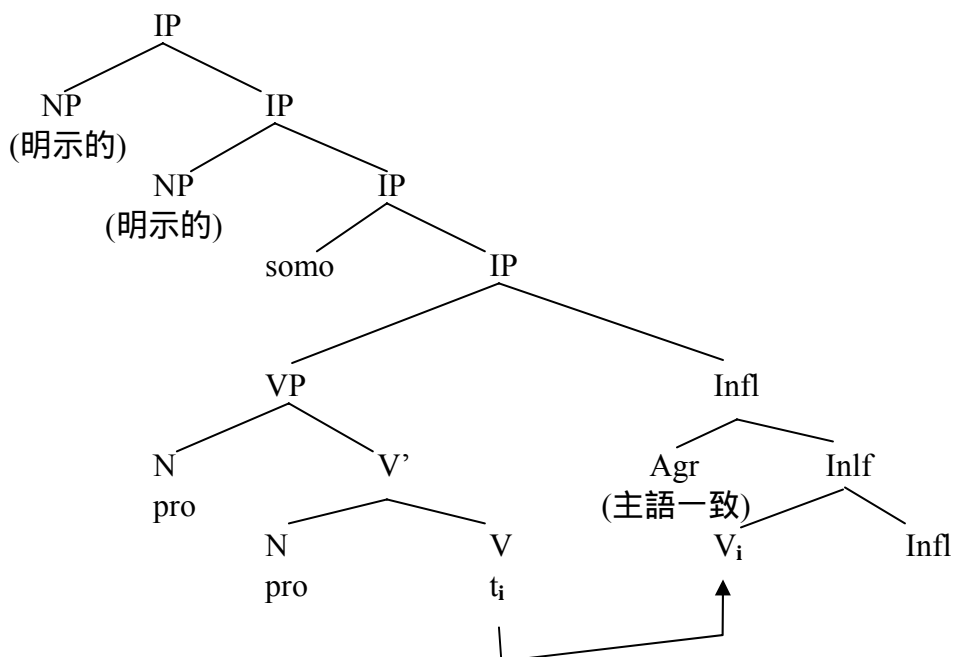
- (51) a. *saki nen ka somo nukar* 「サキは誰も見なかった」
 サキ 誰 NEG 見る
- b. *saki nep ka somo nukar* 「サキは何も見なかった」
 何 NEG 見る
- c. *nen ka somo ke* 「誰も来なかった」
 誰 NEG 来る

第3節で仮定した構造を前提に、*somo* の構造上の位置を考えてみよう。まず、(52)に示すように *somo* は主語人称一致形態素の前に現れる。

- (52) *somo ku=oman* 「(私は)行かない」 (井筒 2006: 322)
 NEG 1sS=行く

また、(51)で見たように、独立の名詞句として現れる目的語の後に現れる。これらのことから、*somo* は構造上(53)に示すような位置にあると考えることができる。

(53)



somo は構造上、文否定要素として機能できるだけ十分に高い位置に現れている。意味論的観点からも、somo は明示的な名詞句があるなしに関わらず、文否定の要素として機能できるわけであるから、文全体を自分の作用域にとっていると考えることができる。

ここまでをまとめると、普遍量化に関しては、さらに詳細なデータの検証が必要であるが²⁵、アイヌ語においても英語の everything/everyone に対応する真性の普遍量化表現が存在しない可能性がある。また、否定量化に関しては、上記の議論から、英語の nobody/nothing に対応する真性の否定量化表現はアイヌ語にはないと考えてもよさそうである。もしこのような考え方が正しければ、この点に関してアイヌ語はモホーク語と同じ文法的特性を示していることになる。

4.2.3 存在量化(existential quantification)

さて、上記否定量化の議論の中に出てきた「不定の名詞 (uhkák ‘someone’ や thénΛ ‘something’)」が、真性の存在量化詞であれば、モホーク語には少なくとも一種類の量化表現があることになる。これらの名詞の用法を詳しく見てゆくと、話者が特定の人や物を指す意図で使われている場合がある。たとえば、(54)の少なくとも一つの解釈では、話者は誰が来るのかを知っているが、あえてその人物の名前や特性を明示せずに述べている。

(54) Uhkák t-á'-yΛ-[e]-'.

Somebody CIS-FACT-FsS-go-PUNC

‘Somebody is coming.’

(Baker 1996: 60)

²⁵ nen ne yakka (誰でも・誰であれ) や nep ne yakka (何でも・何であれ) が、every タイプの文法的振る舞いをする (すなわち真性の普遍量化表現である) のか、集合的 all タイプの振る舞いをする (すなわち真性の普遍量化表現ではない) のかは、残念ながらデータからの検証ができていない。

不定の名詞のこのような用法は、specific indefinite と呼ばれ、その文法的な振る舞いは、definite description や referential noun と同じであると考えられている(Heim 1982: 220-225, Reinhart 1983: 115-116)。したがって、このような用法で使われている限りにおいては、モホーク語の *uhkák* ‘someone’ や *thénΛ* ‘something’ は、真性の量化詞ではないと考えることができるので、Baker の理論の予測と矛盾しない。

しかし、明らかにこのような referential な解釈では不適切となる *uhkák* ‘someone’ や *thénΛ* ‘something’ の使用例が存在する。たとえば、(55)を考えてみよう。

(55) a. *Tyótku uhkák Λ-yuk-kΛ-’ nónΛ kanát-a-ku*
 always someone FUT-FsS/1sO-see-PUNC when town-φ-LOC
 y-Λ-k-e-’.

TRANS-FUT-1sS-go-PUNC

‘Someone always sees me when I go to town.’

b. *Niyesorek uhkák yuk-yenawá’s-e’.*

Rarely someone FsS/1sO-help-HAB

‘Rarely does someone help me.’

(Baker 1996: 60-61)

ここでは、特定の someone の話をしているのではないことは明らかである。すなわち、*uhkák* は束縛変項の一種として解釈されているのである。そこで、Baker は Heim (1982) の提案を採用して、*uhkák* それ自身は量化の意味は持っておらず、量化副詞(quantificational adverb)によって、量化の意味が与えられていると分析している。したがって、たとえば (55a) の主節部分は、(56) のように表示される。ここで重要なことは、ゼロ代名詞 *pro* は *uhkák* によって直接束縛されているのではなく、量化副詞 *tyótku* ‘always’ に仲立ちされることによって、束縛変項としてライセンスされているということである。

(56) $[_{IP} \text{always}_i [_{IP} \text{someone}_i [_{VP} \text{pro}_i \text{ sees me}]]]$

このように *pro* が「寄生的(parasitically)」にライセンスされることによって、Rizzi の条件 (39) ((57)として再録) に違反しない構造となっている。

(57) A pronoun cannot be locally ... bound by a quantifier.

アイヌ語の *nep ka* (何か something) や *nen ka* (誰か somebody) にも同様の分析を当てはめることが出来るかに関しては、慎重にデータ分析を行わなければならないが、次のような例は、このような方向が可能であることを示唆している。

- (58) ... hunne an kor nep ka seta ekota itak pokon e=weyyekar.
 always something dog to speak like you=speak-ill-of
 「いつも何か(を) 犬に向かって話すように、お前は悪く言う」

(Izutsu 2004: 138 [1115010-1115013])

これも weyyekar の目的語が動詞句内のゼロ代名詞 pro と IP に付加した overt NP nep ka であると考え、pro は nep ka によって直接束縛されているのではなく、量化副詞 hunne an kor ‘always’の仲立ちを介して、寄生的に束縛変項としてライセンスされていると分析できる。そうすると、Rizzi の(57)に違反せずに、正しい意味解釈が得られる。

さて、モホーク語とアイヌ語以外のその他の多総合的言語では、量化表現に関して、どの程度、モホーク語と似た振る舞いをするであろうか。Baker によると、いくつかの言語において、理論の予測どおりの性質を示していることが確認できる。たとえばナワトル語 (Launey 1981 のデータ) には、いくつかの普遍量化詞的振る舞いをする単語があるが、それらは全て、結び付けられる名詞句も対応する動詞も複数形の形態を要求する。また、いわゆる否定の数量詞は、常に文頭の否定接語(negative particle)と不定の名詞句の組み合わせによって表現される。グンウィングアン語族のヌングブユ語(Nunggubuyu)には、英語に見られるような決定詞としての数量表現詞は一切存在せず、普遍数量詞的な意味を表わす方法は、ngaraG や wara といった動詞の接頭辞による。これらの接頭辞は項(主語や目的語)が複数であることを示す機能を果たしているが、「対象となるもの全て」という意味には必ずしもならない。これと同様の機能を持つ要素が、マヤリ語(Mayali)にも豊富に見られる。Heath によると、ヌングブユ語には英語の nowhere や nobody に対応する要素はなく、否定の量化表現は、通常の名詞句を wa:ri や yagi という接否定辞(clausal negation particle)の作用域に置くことによって表わされる。また、ウィチタ語(Wichita)では、CP 主要部に生成される文頭辞(clause-initial particle)によって、否定が表現される。

4.3 疑問詞

モホーク語の疑問詞句(interrogative phrase)は弱交差現象を示すなど、真性の量化詞としての特性を持っている。したがって、もしモホーク語の疑問詞(句)が IP に付加された位置に現れ、それをライセンスするゼロ代名詞が動詞句内にあるという多総合的言語の基本構造になっているとすると、Rizzi の条件(39)に違反することになってしまう。そこで Baker は wh 句は(59)のように VP 内の項位置に現れ、義務的な wh 移動によって CP 指定部に顕在的に移動すると提案している。

- (59) [CP wh_i [VP t_i V]]
-

この構造においては、動詞句内の項位置にあるのは wh 句の痕跡であって、ゼロ代名詞ではないので、Rizzi の条件(39)の違反にはならない。このことは、モホーク語においては顕在的な wh 移動が義務的であるということを示唆している。そして、実際にそれは事実を正しくとらえていると考えられる。モホーク語の wh 句は CP 指定部と考えられる文頭の位置に必ず現れる。モホーク語で wh 移動が義務的であるのは MVC からの帰結であると考えられるのである²⁶。このことは、その他の多総合的言語においても、顕在的な wh 移動が義務的であることを予測する。

ナワトル語では、通常の名詞句は全て動詞の後ろに現れるのが一般的であるにも関わらず、wh 句は文頭位置にしか現れることができない。また、ヌングブユ語では、語順が比較的自由であると考えられているにもかかわらず、wh 句は通常文頭に現れる。マヤリ語、カイオワ語、ウィチタ語、チャクチー語においても同様の一般化が成り立つと考えられている²⁷。したがって、多総合的言語において wh 移動が義務的であるという特性は、MVC からの帰結として自然と導かれるものであると Baker は論じている。

一方で、モホーク語などと同じ head-marking で非階層的(nonconfigurational)な言語でも、wh 句がもと位置にとどまっているように思われる言語もある。ラコタ語(Lakhota)やアイヌ語である。まず、この点に関して比較的良好に研究されているラコタ語の場合、いわゆる疑問詞は不定の名詞句であり、それが疑問辞(interrogative particle)の作用域に現れていると分析できる。

(60) Q-particle [_{IP} indef NP_i [_{IP} [_{VP} pro_i V]]]

この構造では、ゼロ代名詞 pro は不定の名詞句によって直接束縛され認可されているのではなく、Q-particle を解して「寄生的に」認可されていると考え、Rizzi の条件(57)に違反しない²⁸。この考え方が正しければ、ラコタ語では義務的な wh 移動はないが、それでも MVC の値が yes に設定された多総合的言語の一つとみなすことができる。

アイヌ語の場合はどうであろうか。Shibatani (1990: 82-83)は、アイヌ語では主語が明示的に現れてこない場合が多いので、疑問代名詞が文頭に現れやすい傾向にあるが、必ず文頭に移動しなくてはならないわけではないと述べ、次の例を挙げている。

(61) Eani hemanta e-e?
 you what 2sS-eat'
 'what do you eat?'

²⁶ Baker (1996: 66ff)以下の議論を参照。

²⁷ Baker (1996: 72-73)を参照。

²⁸ Baker (1996: 93, fn30)を参照。

田村(1977: 166)も「疑問詞が義務的に文頭に移動するというようなことはない。しかし頻度から言って、疑問詞は文頭に立つ場合が自然多い」と述べている。アイヌ語では、文法の原理によって wh 移動が義務的に駆動されることはないということである。では、アイヌ語の疑問詞疑問文に対して、ラコタ語のような分析は可能であろうか。すなわち、アイヌ語の疑問詞は基本的に不定の名詞句であり、それが疑問の particle によって束縛される（あるいは疑問の particle の作用域に現れる）ことによって、疑問詞として機能するという分析ができれば、ラコタ語の場合と同様に、Rizzi の条件(57)に違反せずに疑問詞疑問文を作ることができる。

まず、日本語の「何」「誰」が「疑問詞」として機能する場合を考えてみよう。これらは不定の名詞であり、それだけでは量化詞として機能することはできない。いま、疑問詞としての機能に限定すれば、通常、疑問の particle 「か」「の」などを文末に必要とする。

- (62) a. 誰が食べたの
 b. 君は何を買ったの
 (63) a. 誰が食べた
 b. 君は何を買った

疑問の particle が明示的に現れていない(63)において、「誰」や「何」が疑問詞として認可されるためには、文末を上がり調子で読まなければならない。疑問詞疑問文に対応する部分を埋め込み文にして、上がり調子で読むことができない状態にしてやると、疑問の particle 「か」が義務的になる。

- (64) a. [誰が食べたか]教えてください / *[誰が食べた]教えてください
 b. [君は何を買ったか]知りたいのです / *[君は何を買った]知りたいのです

すなわち、不定名詞の「誰」「何」などは、文末の particle あるいは特別なイントネーションによって、文全体が疑問文であることを形態的にマークしてやってはじめて、「疑問詞」として機能できるのである。

同様の分析が、アイヌ語にも当てはまると考えられる。田村(1977: 164)によると、疑問詞疑問文は、「文末に終助詞 ya 《かどうか》を伴うこともあるが比較的まれである。しり上がりのイントネーションを伴う」(下線筆者)。さらに、埋め込み疑問文の場合には、「疑問詞の有無にかかわらず、文末動詞の後に ya 《かどうか》を置く」(田村 1977: 165)必要がある。すなわち、アイヌ語の疑問詞も、particle の ya またはイントネーションによってその文が疑問文であることを明示的にマークすることによって、はじめて疑問詞として機能できると考えることができる。「何」「誰」に対応する語(の少なくとも一部)が、something、somebody の意味にも用いられる nep / nen という要素を共有していることから

も、アイヌ語では、それ単独ではその機能が不完全な不定の名詞が、疑問の particle の作用域に入ることによってはじめて「疑問詞」として機能すると分析することが可能である。主節疑問文の場合は、ya が明示されることは「比較的まれ」であるが、かならず上がりイントネーションで読まれなければならないということから、この場合も、抽象的な（それ自体の音韻素性をもたない）疑問の particle が ya が現れる位置にあり文全体のイントネーションを決める働きをしていると同時に、nep / nen などの不定名詞をその作用域にとっていると考えることができる。

このように分析することによって、アイヌ語では義務的な wh 移動は存在しないが、不定の名詞（句）が疑問の particle によって認可されることにより wh 句として機能するラコタ語と同じメカニズムを持っていると仮定することができる。この考え方が正しければ、アイヌ語も Baker の提案する多総合的言語の基本構造を決定する大パラメータに従っており、真性の多総合的言語の一つであるといえる。

Baker (1996)は、アイヌ語を含む七つの「多総合的言語」に関して、MVC のパラメータの値が yes であることから帰結する多くの特性を共有していると論じている。その中で、アイヌ語に関する部分が、データの面でもっとも弱い部分であった²⁹。本節の後半（4.2 節と 4.3 節）では Baker の中で検討されている諸特性のうち、アイヌ語に関して、詳しい議論が必要と思われる点を二つ採り上げた。一つ目として、「真性の量化表現が存在しない」という特性について、アイヌ語に関する Baker の結論は「不明(unknown)」(ウィチタ語、チャクチー語に関しても「不明」となっている)となっている。二つ目は、wh 移動が義務的であることが「多総合的言語の特性」であると Baker は論じているが、これに関してアイヌ語は明らかに「No」である。本節では、まずアイヌ語においても「真性の量化表現は存在しない」という特性が確認できる可能性があることを論じた。また、「義務的な wh 句移動がない」という点に関しても、アイヌ語の疑問文中に現れる「疑問詞」は、疑問の particle によってライセンスされる不定の名詞であるという分析ができる可能性を論じた。すなわち、wh 移動が義務的ではないという特性があるからといって、必ずしもアイヌ語が Baker の定義する意味での「多総合的言語」から排除されるわけではないのである。

5. おわりに

本稿では、言語普遍的原理に基づく理論言語学の成果に基づいて、アイヌ語の特徴の一部を検討してみた。特に、Baker の提案する「多総合性パラメータ (polysynthetic parameter)」という視点を通してみると、いくつかの点において、アイヌ語が Baker の定義する意味での多総合的言語である可能性が確認できた。しかし同時に、このような結論は保留すべきであると思われる現象も存在する。

²⁹ Baker (1996:497-498)参照。

理論言語学研究の大きな目標には二つの面がある。一つは理論的な道具立てを駆使して、ある特定の言語の特徴を明らかにするという仕事である。とりわけ、言語普遍的な原理やパラメータの視点からアプローチすることによって、分析対象となっている言語の類型論的特徴が、より抽象度の高い視点から明らかになり、一見無関係に思われる言語現象や特性（一つの言語内であれ、汎言語的であれ）が、実際には少数の基本的言語普遍的原理からの帰結であるという説明ができるようになる可能性がある。そしてこのような研究は、次の二つ目の目標のためにはなくてはならない大切な基礎資料となる。

理論言語学研究の二つ目の大きな目標は、特定の言語データの分析により、言語理論をより精緻化してゆくこと、そしてそれにより人間が生得的に持っていることばを操る能力の本質に迫ってゆくということである。後者の点に関して、日本語や英語の分析や、従来の多総合的言語のデータからでは明らかにできなかったような理論上の問題点が、アイヌ語データの分析からの貢献によって解決できるということ、あるいはアイヌ語のデータ分析から理論の発展に大きく貢献するような新しい仮説や提案がなされることが、将来的に起きてくることが強く期待される。しかし、これに関してはまだ糸口も見えていないのが現状であろう。

前者の目標に関しては、これまでのアイヌ語の伝統的な研究の視点や方法からは見えてこなかったような、アイヌ語の特徴、これまで原理的な説明を与えることができなかったようなアイヌ語の現象などに、新しい説明の可能性を提供することによって、アイヌ語の真の姿に少しでも迫ろうという研究が望まれる。本稿は、この点に関しての一つの試論である。アイヌ語研究には長い伝統と蓄積がある。一方で、理論言語学の研究も特に 1980 年代以降、言語普遍的な原理の提案とそれに基づく、少数言語の研究もアメリカを中心に盛んに行われてきている。残念なことは、ごく一部の例外を除き、この両者の有意義な相互関係が築かれていないことであろう。本稿がそのような関係を築くためのささやかな橋渡しのきっかけとなってくれれば幸いである。

* 謝辞

本稿執筆の機会を与えてくれ、また、アイヌ語データに関して全面的にサポートしてくれた、井筒勝信氏に感謝します。氏の優秀なエディターとしての助言にも大いに助けられました。また、コーパス・データ分析の方法に関して、筆者を援助してくださった北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院の高見敏子氏にも感謝します。議論における不備や思わぬ誤りは、全て著者の責任に帰するものです。

Appendix

1	first person	
2	second person	
3	third person	
A	noun gender class A (南チワ語)	
APPL	applicative	
AUX	auxiliary	
BEN	benefactive	(古くは dative とも)
CAUS	causative	
CIS	cislocative	
COMP	complementizer	
CONTR	contrastive	
F	feminine	
FACT	factual	(古くは aorist とも)
FUT	future	
HAB	habitual	(古くは serial とも)
IMPER	imperative	
LOC	locative	
M	masculine	
O	object	
OPT	optative	(古くは indefinite とも)
P	plural	
PL	plural	
PAST	past	
PERF	perfective	
PRES	present	
PUNC	punctual	
S	subject	
S	singular	
SG	singular	
STAT	stative	
TRANS	translocative	

参考文献

- Allen, Barbara, Donna Gardiner, and Donald Frantz. 1984. Noun Incorporation in Southern Tiwa. *International Journal of American Linguistics* 50: 292-311.
- Baker, Mark. 1996. *The Polysynthesis Parameter*. Oxford University Press.
- Baker, Mark. 2001. *The Atoms of Language: the Mind's Hidden Rules of Grammar*. Basic Books.
- Baker, Mark, Kyle Johnson and Ian Roberts. 1989. Passive Arguments Raised, *Linguistic Inquiry* 20, 219-51.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Foley, William. 1991. *The Yimas Language of New Guinea*. Stanford University Press.
- Heim, Irene. 1982. The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases. Ph.D. Dissertation, UMass.
- Jelinek, Eloise. 1984. Empty Categories, Case, and Configurationality. *Natural Language and Linguistic Theory* 2, 39-76.
- Jelinek, Eloise. 1988. The Case Split and Pronominal Agreement in Choctaw. In *Configurationality: the Typology of Asymmetries*, ed. Lázló Marácz and Pieter Muysken. Foris.
- Idutsu, Katsunobu (ed.) 2004. *The Ainu Language: A Linguistic Introduction*. Asahikawa: Hokkaido University of Education.
- 井筒勝信（編）2006. 『I/YAY-PAKASNU: アイヌ語の学習と教育のために』北海道教育大学旭川校
- 井筒勝信（編）2007. 『アイヌ語学研究総覧』北海道教育大学旭川校
- Launey, Michel. 1981. *Introduction à la Langue et à la Littérature Aztèques*. Paris, L'Harmattan.
- Lounsbury, Floyd. 1953. *Oneida Verb Morphology*. Yale University Press.
- Mithun, Marianne. 1984. The Evolution of Noun Incorporation. *Language* 60-4: 847-894.
- Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and Semantic Interpretation*. University of Chicago Press.
- Richards, Norvin. 1997. What Moves Where When in Which Language? Ph.D. Dissertation, MIT.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge University Press.
- 田村すす子. 1977 「アイヌ語沙流方言の疑問表現」『アジア・アフリカ文法研究』6: 157-169